

翻刻 名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」(三)

—安宅・一満箱王・景清—

服部 幸造

(承) 翻刻 名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」(一) —夜討曾我・

信田・十番切・大臣—(名古屋市立大学人文社会学部研究紀要

第9号 二〇〇〇年十一月)

翻刻 名古屋市蓬左文庫蔵「幸若音曲本」(二) —兵庫・はま出

・清重・俊寛・新曲・やしま—(名古屋市立大学人文社会学部研

究紀要 第10号 二〇〇一年三月)

(安宅)

さる間はうくわん殿都を御立まし／＼て。十三日と申に加賀の国。安宅の松につかせたまふ。判官松を御らんして。あらゆふてうなる姿かな。四国西国都にて。其数松を見てあれと。か程の松はいまた見す。名のなき事はよもあらし尋て参れむさし。弁慶承り。松のあたりを見たりければ。わらんべが四五人松の葉よせてるたりける。弁慶する／＼とよつて。やあいかにわらんべ。此国にて此松をは何の松とか云そ。こさかしきわらへかす／＼み出て申ける(1オ)

は。さん候当国は。坂をへたて／＼こなた。草ふかき遠国にて。か程の

松に名付る人も候らはす。去なからさいこ中將の哥には。あたかの松ともよまれて候。そののみならず鳥羽院の御内なる。佐藤兵衛則清は。うわの空なる恋をして。北国修行に出るとて西行とかれば名のる「カ、ルフシ」かの西行の哥には「同」ねあかりの松と。よまれたりなふ山伏と。申けり「コトハ」判官聞しめされて。物き／＼給へかた／＼。勸覚院の雀はまふきうをさえつり。智者の辺りの童はならはぬ経をよむ(1ウ)

とは。能こそ是はつたへたれ。こさかしき童に引出物とらせ。平泉への順道を委とへの御誕なり。承ると申て。弁慶か笈よりも。色よき扇取出し。わらんべにとらせ。平泉への順道を委尋とふ時。童聞て。さん候是より奥へは。上道下道中道とて。三つの道の候。先下道の難所を。かたらは聞召れよ。黒辺四十八か瀬。おや知らす子しらす。一ふりしやうと哥のわき。二三のはさま最上川。あねわの松「カ、ルフシ」かめわり坂と申つ／＼「同」四十二所の。めいよの是か。難所也。少人も。おはしますすかい(2オ)

かてか下り。給ふへき。扱上道の難所は。都の春は過行と。越路の雪かまだ消す。去年の雪の村きえにことしの雪のふりつもり。谷の下水落合てみかさまさりて。鳥ならて通ふへきやう。さらになし「ツメ同」中道と申は。道も順道にて。人の心もじひなれとも。こゝに一つの難儀あり。かまくら殿よりも。ふれ状かくたつて。此国のとかし殿城くわくをかまへて。山伏の禁制こわくして。一昨日の暮程に。九人通る山伏を。判官殿のおつれとて。おさへてきつてかけられたり(2

ウ)

。きのふの早朝に六人通る山ふしを。五位殿のおつれとて。是をも切てかけらるゝ夕部も五人きらるゝけさも三人きれてさふ。かほとなる難所をはいや。たしやうこうはふるとも 「フシ同」いかてか下り。給ふへきなふ山ふしと。申けり 「コトハ」判官聞召れて。扱はなにかし一人かゆへにより。行多も知らぬ山伏達の。左様に多くほろびさせ給ひたるやへつらん。とふらははやと思しめし。松原に入て見給へは。去年の冬の比よりも。二月下旬まで。きりかけたる事なれば。百計かほとまつしぐらにかゝる。十三人(3オ)

の人々は。れんじせんほうをたつとうあそばす。その中に弁慶一人。せんほうをはよまずして。爰かしこをはしりまはつてくびを披見し。五人のわらんべをはつたとにらんで。此国の富樫はなんにも知らぬと云。童聞て。此国のとかし殿の。物しろしめされぬいはれはさう。いてくとかしか。ものしらぬいはれをかたつてきかせん。らんきやうふじやうの。大俗のくびを上にかけ。びんはつをまるめ。げたつどうさうの。種々の法衣を身にまとひ。ほうかひ道場にして 「ツメ同」みろくの出世にむまれを(3ウ)

なさうづくびを。はるかのしもにかけたるは扱物をは知らいでかけぬかれ。わらんべ聞て打わらひ。横手をちやうと合て。わかれたり山伏。それをとかめ給ふか。上にかゝつた俗の首にあまたの異名付られたり。むかふばそつて猿まなこに。こびんのかみのちごんで。色の白きをは鎌倉殿の御舍弟に。源九郎義経の。御くびと号して。はるかの上にか

けられたり。下にかゝつたくびにも。あまたの異名付られたり。かう申てあれはとて腹はしたゝせ給ふなよ。御身のこづくに。あく迄せいは高ふて(4オ)

。きわめて色はくろくして。眼にくじをもつたるが。ものいひたるこわつきの。ぎごつなき山伏をは。判官殿の御内なる。膝本さらずの斎藤の。弁慶とかうして。はるかの下にかけられたるそ。山伏と云ければはいや。さしもかうなる武蔵坊かわか身のうへと聞ないてびさふるうてそたつたりける 「コトハ」さては此国のとかしは。某か面をは能は見しらさりけるや。其儀にて有ならば。なにかし一人立こえ。城のていを見はやと思ひ。きみの御まへに参り。先何かし一人立こえ。城とかしか城の有さま(4ウ)

を見てと申す。判官聞召れて。心かはりかむさし。心かはりに及ふならば。都の土とはなさずして。北国の道芝となさん事こそ口惜けれ。武蔵承り。こは御説とも存知候らはす。か程山伏禁制の所を。十三人かばめいて通り。あやしめられては。いかにちんずるとも叶ひ候まし。先なにかし一人立こえ。城の躰をみんするに。見おうする物ならば。山伏の法にてある間。悦のかいを二つ三つふかふず。又みそんずる物ならば。最後のかいを 「カ、ルフシ」たんた一つ。ふくへきなり

「同」貝ばしひとつ立(5オ)
 ならば。すはや武蔵めか。最後そと思召し。北方の。みまんどうにて清き自害。おはしませ。暇申てさらはとて。立はなれんとしたりしか。思へは是か最後也。傍輩の。人々に名残やおしく思ひけん。亀井片岡

いせ駿河。まぢかきさまに近付て。いかにかた／＼武蔵め一人とかしか館にうつりて。城のけごを見そんじたらは。弁慶か腹きらふず。君御腹をめされなは。死出の山にて待申さん。おかた／＼。さきにも腹を切ならは。三途の川にて待給へ。暇申て。さらはとて名残。おしけに。たち出る(5ウ)

〔コトハ〕さる間弁慶は。飛驒の内匠か。打墨繩にはあらね共。たんだ一筋に思ひ切て。さしも待かくる。とかしか城に入たるは人にかわつて覚たり。山伏の法にてある間。れんじせんぼうをこそよむへきに。武蔵何とかおもひけん。高念仏と申。あげつちかよりつつと入内のていを見たりければまつほとにこしらへたり。表の矢倉十三所。脇の矢倉九の所。二重三重に高矢くらをさせ。東おもてを見てあれは。鞍置馬を四五十疋。ひつ立てをいたりけり。西のとを侍を見てあれは(6オ)

。富樫か若堂百計双ひゐて。ひきめくつたり矢はひたり。基将基双六にこゝろ入たる所もあり。ちやく座を見てあれは四十計なるおのこひやうもんの直垂に。えほしのざしき。たぶ／＼とあけさせ。ぶんだふにかゝつて。若侍に双六うたせ。〔ツメ同〕助言してゐたりけるは是そ此国のあふ富樫の介と覚てあり。荒口惜や時こそあれ日こそあれ。とかしか出たる所へ。なにかしきたつたるはつめたる業と覚たり。しのばやと思ひしか。見えたる事もなきさきに。敵にけごを(6ウ)見えられては。あしかりなんと存すれは。大のこはねをさし上て。熊野山の山伏か仏法修行の。その為に出羽のはくろへ通り候ときれうた

べとかうたり。けれとかしを見て。もつたる扇にて。たゞみの表をちやうど打ていやあれを見よ人々。くにん夏の虫。飛て火にいと能こそ是はつたへたれ。心を尽してまぢかくる。斎藤の弁慶こそ。ただ今きたつたれ。打はれ搦よいや。さし繩なんどひしめいた。本よりも武蔵。わが身の上とはしつたれ共。聞ぬ躰にもてなして大木(7オ)

小木の花なかめそらうそふいてぞたつたりける。〔コトハ〕時刻をうつさず富樫か若堂百人計。まつくろによるひ。武蔵をまん中にとりこめたり。弁慶はやりうの若者共に。ひし／＼と打とめられ。あしかりなんと存れは。とがしかるたりしえんのはなへ。する／＼とよつて。鈴懸のたもと引つくるひ。大の眼にかどを立。とかしをはつたとらんで。いかなる野心ちやうぎやうのものななどを。めしをかれ候らひて。只今参たるほつし迄も。うきめを見んするやらんと。存知て候らへは。能々うけたま(7ウ)

はつて候に。此法師か身の上と聞て候はそらことさふかとかし殿。富樫きいて。扱は汝は判官殿の御内なる。膝本さらすの斎藤の弁慶にてはなきか。えゞどこにさふ。山の名は。よのつね多しと申せ共。判官坊膝本さらすと云山伏の名をは。今こそ聞て候らへ。さ様に才覚まはつて。弁舌の明らかなるは弁慶にてはなきか。あふ才覚まはつて弁舌の明らか成か弁慶ならは。さの給ふ富樫殿の。才覚まはつて弁舌の明らかになりますさて御身も弁慶か。富樫きいて。いや(8オ)何ともちんぜよたゞ弁慶と云。武蔵あまりにちんじかね。もし此ほつ

しかひたひに。弁慶と云字はしすはつて候か。字のすわつたると同じ事よ。鎌倉とのよりも。絵図のあるうへうたがひあらじと云。よもあらし。たはかりことぞと。心得ししやうのあらは見んところた。あらむざんの弁慶か。いく程命ながらへんとて。ゑづをかうつるやさしさよ。それ取出して見せよ。承ると申て。若さふらひがざしきを立て。八尺屏風を取出し。むさしか前にさつと立。絵図をさらりと打かけて弁慶に(8ウ)

見する 「カ、ルモンタイ」写しもうつひたり書もかいたる絵師かな
 \むさしかたけは \六尺 \二分 「フシ同」絵図も六尺二分なり。色黒くたけ高く。眼のにくぢをうつひてあり。あまつさへは武蔵との。左のまなさきにあざの有まで。うつひたはのかれつびやうは。なかりけり 「コトハ」武蔵今は詞をかへてちんする所とおもひ。いかにとかし殿。以前に此ほつし。熊野山伏と申せしは。御身の心の程をもちつと引見申さんため。是こそ南都東大寺の。勅進聖さうよ。とかしきいて。まことに(9オ)

南都のすゝめにて御座あらは。勅進帳は有へし拜まんとこはれたり。あらむざんの弁慶か。南都のすゝめとはのへたれとも。勅進帳はあらはこそ。もたぬといはよ。ばう打に打ふせられうづ。もつたといはよ。あらばこそ。是非をむさし。わきまへかねて立たりしか。いやく。もつたといはよやと思ひ。をろかなりとかし殿。三國一の大がらんのすゝめをしやうずるひじりか。勅進帳をもたてはいかゝ候へき。見参に参らんと。笈をひつたとをろし。からけ縄ふるくといつといて。

上段に(9ウ)

手を入。からりくときかしけれ共。みやこにて入さる事なれば笈にはさらになかりけり 「カ、ル」武蔵余りのくちおしさに 「フシ同」目をふさぎ。南無や八幡大はさつ。源氏の氏子をは。百王百代。守らんと。御ちかひと承りて候か。ひとつのずいさうを。見せしめ給へやとからり。くときかさるゝ。実や八幡大菩薩の。あたへたひけるや。しげんの往来の。巻物一卷候らひけり。おつ取てさし上て。

勅進帳は。是にあり拜み。給へと。見せにけり 「コトハ」とかし御覧してたつとふ候。これへ(10オ)

たび候らへおかまんとこはれたり。武蔵此勅進帳が。まことのくわんじん帳ならば。いかにとかしか。おかましといふともおさへておかませうか。これは自然の往来なり。一字なり共これとはいはれ。あしかりなんと存れば。富樫をはつたとにらんで。をろかなりとかし殿。忝も十善帝王たにも。冠のこしをかたむけ。おかませ給ふ勅進帳を。申さんや御身は。大俗の身と有なから。手にとりおかむ物ならば。五体すくんで。立所あやうしとおとす。むさしにおどされ。さあらはそれにてあそ(10ウ)

はせ。是にて聴聞申すへし。むさし此勅進帳を。よみあふせん事はふぢやう。よみそんぜん事治定。よみそんずる物ならば。人手にはかゝるましい。あれにつめて立たる。白柄の長刀ひんばうて。とんでかかるもの共を。いちくにおつはらひ。あれにひいて立たる。あし毛なる駒の。爪かたさふに。いかにかけあしのはやかるらん。ひんばうて

打のり。みまんだうにまいり。君にこのよし申。一のかたなにて。御前害し奉り。むさしめはらをきらふず。きみ御腹を召れ(11オ)

なは。十一人の人々も。みなくはらをきらふず。生てはかうをなさすとも。死てはこうをなすへきなり。「カ、ル」日比我か君の。七生までと契りをかせ給ひたる。「ツメ同」愛宕の山の太郎坊。比良野山の二郎坊。山／＼の正天狗天のやしん。八しやうしん。牛頭めんづあはふらせつ。異形異類の鬼共を。引くし候て。本望ならば関東へ。せつなかに。みたれ入て箱根のたうげより。黒雲のたな引。電光をとばし。たまをみがく鎌倉に。しやぢくの雨をふらし。八七郷を洗(11ウ)

なかし。にくかりし梶原を。さふなくもころさすして。百鬼神におほせ付。ねつてつの湯をわかし。口のうちへなかし入。六腑五臓を。焼はらひ七代子孫を取ころして。本望をとくるならはかんせうじやうにてあらずとも。あら人かみとむさしめが。あふがれんずる事共はあんの内と思ひければちつともさはく事はなし。「コトハ」むさし此勸進帳を。たかくもつてよむならば。うしろなる人々によまれうす。又ひきくもつてよむならば。紙かうすふて字かとをり。前なるとかしに。

一字なりとも(12オ)

それはといはれ。あしかりなんと存ずれば。六尺二分の弁慶か。七尺ゆたかにのびあがり。しらうちでのかさを。づかうにきつときないて。字ならば二くたり三くたり。「カ、ル」そつとひらいて。「ヨミモノ同」左右眼に押あてて。なにとはしらねとも敬白とあげたりけり。う

やまつて申勸進の沙門こくうだんの。智識の状にはく。和州やましの里東大寺の。勸進の事ことに十方旦那の助成を。かうむらんと欲右のしいしゆいかにと云に。かのがらんの。らんしやうは(12ウ)

聖武天皇のきさき光明。皇后と申は太職冠の御娘。正身の観音なり。しかるにうろのしやうがいは。あゆみをたがひにかくるしやくそんまたさうりんの煙とのぼり給ふ然るに帝后の。御わかれたえにして。雲上に曇りあれば月卿光りを。うしなへりかの追善のために。いつちうのがらんを建立し給ふ今の。大仏殿是なり。御堂の高さは。二十丈。本尊の御たけ。十六丈とをく異朝を。尋るに太唐四十八ヶの。大がらんにすぐれ天竺祇園精(13オ)

舎にも。こえまして。我朝に双ひなしされはしやうごん。七ほうをちりはめこうやうらんけいのみかき御堂のうちに珠玉をかざり。瑠璃のかべしやこうのたる木めなふのゆきげた。はりのはしら本尊は金剛るしやなぶつ并に四天はこがねをのべ。十一しうのやうらく。虚空むがの。風にみだり花しやうえんの。玉の幡かゝる無双の。大からんにらくわふつてくわせつすはめつの時に相たがはず。爰に深草の御門のぎやうざう。ごぢのきさみに。こうりよくし(13ウ)

。ことくぐみかき給ふ。是は是王法の繁昌也。王法のはんしやうは。天下の吉慶たりめてたかりける。おりふしに爰に東大寺。興福寺。両寺の間に衆徒喧嘩を出し互にはめつ。の火を放すまことにまえんの。しよいをなしけふり庭に。とんておちらくわ雲をはしれは仏ざう。跡をけづり。ごぢの箱やけはつきやうのぢくもはいとなす爰に女躰の

帝のぎやうざう。勸進の力をはげますとはいへ共三だいごぐわんも半作なり。めてたかりける折(14オ)

ふしに爰に平家の大相国悪逆の下知に。したかつて本三位の中將重衡左衛門友高民部重吉都合其勢三千余騎。治承四年十二月。廿八日に南都へはせむかふ南都の衆徒ふせき。たゝかふとはいへとも法王末世につき。忝もにかひのさうもんでかいの門に放火をせしむる。かのみやうくわ。みち／＼て堂塔。惣坊神社のきらひなくいつちうものこらす。焼はらひおわんぬけふりうちやう。天にあがり。雲となつてあらそひければ十六丈の。るしやなぶつ(14ウ)

の。みくし落てつかのごとし御身はわいて。山のごとしこんしん世界の。しやうごんをうつし奉るたうこんだう。さいこんだう。せつなかに。焼はらひおはんぬかなしきかなや。おんあひ別離の生死の小車あれをみ是をみるにいつをか。期すべきと御眼鹿と成て。春日山に飛入給ふ。比丘も比丘尼だうぞく男女の。きらひなく大仏殿の名こりをかなしみほなふの中へとびいり／＼焼しするものは。かずしらずあなんふそくの靈地のけさくわひしんと成て。ちにふまるぎやうごう(15オ)

ほろひけいきよくたるこそたへのつゆ。じやう／＼たり。たま／＼残りともまるもの。ししやうきやうていのかとにたちよりしはらくはねをやすむる爰に。しゆじやう坊ひじりぜんぜいばう。春日大明神の。

御自現をかうむつて。勸進帳をひたひにあて。恐れ／＼。法王の御方へ訴状を上らるゝ法王こんちつとはこはせ給ひ。肥後肥前。筑後筑

前豊後豊前日向大隅薩摩九国を。よせらるゝ。女院の御方より。伊与讃岐阿波土佐。四国をよせられたり。四国(15ウ)

九国より。鍛冶千人番匠千人仙千人三千人。春日山へ。分入て材木を取て淀こつ川へ下す事。おびたゝし。しかりといへと。かの大もつと。小もつと。いかにとして地形のおもてに引付へきと歎かなしむ。かつこうのなんだ肝にめいじ。三宝のめくみにより。太国より。ちしやの牛がきたつて。一日一夜に。引付て牛太国へかへりけり。日本人悦で。地形のおもて。御高堂の高さ廿丈。本尊の御たけ十六丈。かうは八てう多門持国増長広目。百よせんのふづくへ。鈴独鉈花皿。ものごとく(16オ)

鑄奉る。さりといへと。御堂の供養仏の供養鐘のくやう三供養をまだとげず。此供養をのべん為。六十六人の。さても小聖が。六十六ヶ国へ。各まはつていやすゝむる所の勸進なり。一紙半銭にいららんずる輩は。今生にてはあんおんけらくの。とくをかうむり。来世にては。ぐぜいの舟に棹をさし。せんぢやうの蓮花に。たはむれんずる事はうたかひ有へからす南無帰命けいとよみあげて。くる／＼とひんまいて。本の笈へなげ入たる。武蔵坊か有様。人間のわさにて(16ウ)

なかりけり(17オ)

【校異】

本曲の校異に使用した諸本は次の通り。(内)内閣文庫本、(毛)毛利家本、(東)東大本、(直)直熊本、(京)京都大学一本、(慶)慶応大

- 1オ ○都を御立まし／＼て十三日と申に―(京・慶) くだらせ給ひける程に ○十三日と申に―(内・毛・直) 急かせたまひける程に ○つかせたまふ―(内・毛・直・京・慶) 程なくつかせ給ふ
○あら―(京・慶) ナシ ○か程の松はいまた見す―(京・慶) かほとゆふちやうなる姿はなし ○弁慶承り―(京・慶) うけたまはると申て ○松のあたり―(京・慶) まつのもと やあ―(他本) ナシ ○申けるは―(毛) 申ける、(直・京・慶) 申す
1ウ ○哥には―(京・慶) なかめには ○うわの空なる―(京・慶) 無為なる
- 2オ ○承ると申て弁慶か笈よりも色よき扇―(京・慶) むさしうけたまはり色よきあふき四五本 ○平泉への順道を―(京・慶) 平泉への順道はいつくを尋てゆくそと ○童聞て―(京・慶) 子細わらむへすゝみ出て申す ○おや知らす子しらす一ふりしやうと哥のわき―(京・慶) 一部里浄土宇田のわき親しらす子しらす
○少人もおはしますかいかてか下り給ふへき―(直) ナシ
- 2ウ ○判官殿の―(京・慶) 五位殿の
- 3オ ○五位殿の―(京・慶) 判官殿の ○扱はなにかし一人かゆへにより―(京・慶) あら痛はしや ○左様に多くほろびさせ給ひたるや―(京・慶) それかし一人かことによつてさやうにうたれ給ひけるやゆきて ○給ひたるやへつらん―(内・毛・直)

- 東) たまひつらん ○松原に入て―(京・慶) 五人のわらむへをさきたてまつはらにいつて ○十三人―(直・京・慶) 十一人
- 3ウ ○弁慶一人―(東・京・慶) 弁慶 ○扱見し―(内・毛・東・直) 見、(京・慶) しつけんし ○五人の―(京・慶) ナシ ○此国のとかし殿の―(京・慶) 富樫殿の
- 4オ ○くびを―(京・慶) 法師のくひ ○異名―(京・慶) たんさく ○むかふばそつて猿まなこに―(直) ナシ ○くびにも―(京・慶) 法師のくひに ○御身のことくに―(京) 御坊へ山伏のことくに、(慶) 御坊のことくに
- 4ウ ○さては―(内・毛・直) 武蔵心におもひけるは扱は、(東) 武蔵心にあんじける扱は、(京・慶) 武蔵心に思ふやうさては ○此国の―(毛) ナシ ○面をは―(京・慶) 姿をは ○其儀にて有ならば―(京・慶) ナシ ○なにかし―(東) ナシ ○きみの―(毛) 判官の ○参り先何かし―(内・毛・東・直) かしこまり某 ○きみの御まへに参り先何かし一人立こえとかしか城の有さまを見て申す―(京・慶) 判官の御前に参りこのよしかくと申上る
- 5オ ○見てと申す―(内・毛・直) 見てまいらんと申 ○十三人か―(京・慶) 一人ならず二人ならず十三人か
- 5ウ ○おかた／＼―(内) あふかた／＼ たち出る―(京・慶) たちわかる
- 6オ ○さる間―(毛) 扱も、(直) 角て ○飛驒の内匠か打墨繩には

あらね共―(京・慶) ナシ ○武蔵何とかおもひけん―(京・慶) なにか思ひけんむさし ○あげつちかよより―(京・慶) おもての門より ○まつほとに―(内) 戸櫓か城の有様まつほとに、(京・慶) 富樫か城の軀をまつ程に

6ウ ○双ひるて―(京・慶) るなかれ ○敵に―(京) ナシ

7オ ○かうたりけれ―(直) よばはつたり ○しつたれ共―(直) をもひけれ共 ○大木小木の花なかめそらうそふいてぞ―(直) よそめしてこそ

7ウ ○時刻を―(京・慶) 斯て時刻を ○打とめられあしかりなると存れば―(内・毛) うちとめられてはあしかりなとおもひ、(東) うちとられあしかりなとぞんずれば、(直) とりこめられあしかりなと思ひ、(京・慶) うちとめられてはかなはしと思ひ ○鈴懸のたもと引つくるひ―(京・慶) ナシ ○ものなんどを―(内・毛・東・直) ものともを、(京・慶) ものを ○ほつし迄も―(京・慶) 我等までも ○うきめを―(直) いかなるうきめを ○存知て候らへは―(京・慶) 随分存て候に

8オ ○汝は―(京・慶) 御坊は ○斎藤の―(京・慶) ナシ ○山の名―(他本) 山伏の名 ○判官坊―(毛・直) ナシ ○山伏の―(東) ナシ ○さ様に才覚まはつて御身も弁慶か―(直) ナシ

8ウ ○たゝ弁慶と云：同し事よ―(直) ナシ ○もし此―(内・毛) たゝしかふ申、(京・慶) かう申す ○弁慶と云字―(毛・京

・慶) 若弁慶といふ字 ○たはかりことぞと心得―(直) ナシ ○やさしさよ―(京・慶) むさむさよ ○若さぶらひがざしきを立て―(京・慶) ナシ

9オ ○色黒くたけ高く―(直) 長高く色黒く ○今は詞をかへてちんする所とおもひかにかにとかし殿―(京・慶) 心に思ふやういやく所せん辞をかへて陳するところと思ひ ○熊野山伏―(毛) 熊野山の山ぶし ○心の程をも―(内) 心地、(毛・東・直・京・慶) 心を ○まことに―(内・直) たつとふさうまことに、(毛・東・京・慶) たつとふさふ

9ウ ○有へし―(内・毛・直) おはすらん、(東・京・慶) あるらんに

○もたぬといはゞいはゞあらばこそ―(直) ナシ ○見参に参らんと―(内・毛・直・京・慶) 是非見参にまいらんと云まゝに ○ひつといて―(内・毛・直) ほどき

10オ ○御覧して―(内・直・京・慶) 是をみて

10ウ ○武蔵此勸進帳が―(内・毛・直・東) ナシ ○くわんじん帳ならば―(他本) 勸進帳にてあらんするには ○いはれあしかりなんと存れば―(京・慶) いはれてはかなはしと思ひ ○富樫をはつたとにらんで―(内・毛・直・京・慶) ナシ ○申さんや―(京・慶) ナシ

11オ ○よみそんぜん事治定―(東) ナシ ○とんでかかるもの共を―(内・毛・直) 飛てかゝらんする若者ともを、(京・慶) とんでかゝらんわかものを

12オ ○よまれうすー(京・慶)よまれてかなふまし

12ウ ○あしかりなんと存ずればー(京・慶)かなはしと思ひ

14オ ○爰にー(他本)ナシ

14ウ ○■ー(他本)仏神

15ウ ○豊後豊前ー(他本)豊前豊後 ○四国九国よりー(東)ナシ

16オ ○しかりといへとー(他本)ナシ

16ウ ○仏の供養ー(直)ナシ ○舟にー(毛)ナシ

(一満箱王)

安元元年神無月の比。おくのゝかりばにてかわづの三郎うたれしとき。五つや三つのわかありしを。曾我の太郎助延かやういくし。兄の一まん十一さい。弟の箱わう九つのとし物うき事こそ候らひけれ。東八か国の大名小名。頼朝の御前にて御物語のありしとき。よりともおほせけるやうは。天下にをいて。頼朝にまして果報のものは候まし。それをいかにと申に。保元の合戦に。祖父為義をはしめ。一門皆討死し。中一とせあつて。ちゝ義朝悪右衛門督(1オ)

にかたらはれ。その軍にかけまけ東国さして落給ふ。その時頼朝も御供申て候らひしか。くらさはくらし雪はふる。にし近江さかり松のあたりにて追をくれ奉り。たゝ一人龍方の闇にまよひしに。横河法師の太將に大屋の中記といつしもの。跡よりも追かけ。既になんぎに及びしに。北近江伊吹のふもと。草のゝしやうじにたすけられ。かれか所に年をこえ。いまはかうよと思ひしに。義朝は長田をたのみ給へとも。

たのむこのもとに雨もりてやみくくと討れさせ給ひ(1ウ)

。御くび上り獄門にかゝらせ給ふよしをきく。せめてかはらせ給ふ御姿をなりとも見参らせ。猶もいのちのなからへは。さまをまかへて御菩提をとい申さんと思ひ。忍ひて京へのぼりしに。います河原と云ところにて弥平兵衛に生捕れ。六はらへ渡され。うたるへきにて有しを池の尼公にたすけられ。北条ひるか小嶋へながされ。伊藤北条兩人に守護せられ。廿二年のしゆんしうを送りむかへて過しとき。伊藤の入道助親につらくあたられ候らひつる。其時の心には。あはれ(2オ)伊豆をしたがへ。野心のものをほろぼし。思ひ知らせはやと。明くれ仏神にきせひ申せししるしにや。日本をあつめてしるのみならず

〔カ、ルフシ〕四海を泰平にいたす事是しかし。なから 〔同〕君の為身のため。ぶりやくのこうにしくはなしと。仰られたりければ。御前。なりし人々も。実々ゆゝしき御果報やと同音に。かんじ申さるゝ〔コトハ〕かゝりける処に。公藤一鵬助恒すゝみ出て申けるは。今こそ幼少に候とも。末のよに野心を存すへきもの一二人。御ひざの下に候と申す。頼朝(2ウ)

きこしめされて。それはさていかなるものぞ助恒。さん候一とせちうせられ申たる。伊藤が孫河津が子。一満箱王とて二人のものゝ候を。曾我の太郎助延か養育つかまつたるよしを申。頼朝聞召れて。曾我の太郎助延は。左様に不忠はあらじとこそ思ひ候らへ。それをいかにと申に。頼朝かよを取たりしはしめより。ふかき忠の候らへは。ずい分此かたをはたのもしく思ひ候に。よりともかす多の世の。てきとなら

ん事こそきつくわいなれ。急かれらをめし上せよ。たれかあるとの。
御説なり(3オ)

。助恒又申けるは。誰々と申とも。梶原の源太かげず多そ候らんと申す。急源太を召れ。いかに景末。伊藤か孫河津か子。一まん箱王とて二人の者の候を。曾我の太郎助延か養育し。成仁するを待ときく。いそきかれらをめしのはせ。うんきをはねて捨へし。はやとくくとの御説なり。源太承り。あら浅ましやとは存すれ共。主命なれば背へず。かしこまつて候とて御前を罷たち。駒引よせて打のり曾我の里にも着しかは。助延の宿所に立より(3ウ)

。君よりのお使に。源太か参りて候とたからかにいひければ。助延頓て立出。景末に対面し。さて君よりのお使は何の為にて候そ。源太聞て。別の子細にて候らはす。御息たちを召上せ。御対面有へしとの。御説にて候。まだようせうの人々に。御罪科は候まし。はやとくくと云ければ。助延きこしめしとかく返事もなかりけり。「クトキ」秋ををくる老葉は風なきにちり。愁をもよほす涙はとはざるにまづおつる。「フシ同」助延の。心のうちをしはかられて哀なり(4オ)

「クトキ」やゝ有ての給ひけるは。哀けに世の中に。子にえんなきものを尋るに助延にとゝめ。たり。「コトハ」それをいかにと申に。おさなき者を二人もつて候らひしか。いとけなくしてはかなくなる。かれらか母は別をかなしみ。幾程なくてむなしくなる。妻の別子共のなげき。一かたならぬ思ひ共に。助延も遁世修行と思ひたつて候処に。伊藤の入道つねにきたり。なにがしをなくきめ物かたりの次而に。承

はれは曾我殿は。妻子にはなれ給ふときく。なにかしか孫。一満箱王(4ウ)

とて兄弟の候を。かれらを養子にし給ひて。母もろともに置給へと「サシクトキ」さいさん申され候ほとに。さすかうき世もいとほれねは。かれらを養育仕り。「フシ同」はや七年の。春秋を送れば。成仁ほともなし。一まん生年。十一さい。箱わう今は九つなり。身のすいらうをもかへりみす。成仁するを。待たるはわかのためか。うらめしや。けにもかたきの末なれば。君のおほせはことほりや。され共助延君のため。今迄不忠をいたさねは。もしもやたすけ。給はんと奉公たてを申さるゝ(5オ)

「コトハ」いかに景末。頼朝の御世をめされたるはしめをかたつてきかせ申さん。石橋山の合戦に。御身のちゝの景時。かう申す助延は平家かたにてむかひしに。「カ、ルモンタイ」源氏のせいを見わたせは、只蟻螂かをのつから、わづかのせいを、たな引て。「フシ同」うんかのことくの。平家のせいをふせき給ふそ。あはれなる。むかしか今にいたるまで。多勢に無勢かなはねは。げんじかせんにかけてまけて。真鶴か。うらに引なみの。頼朝みかたにをくれ給ひ。ふし木の中を頼つゝ。御身を(5ウ)

しのばせ。給ひしは御世の。ひらけん始なり。「ツメ同」その時景時助延。心を合申様。これ私の儀にあらず。先祖のためのかうくなり。いざやとぶらひ申さんと。伏木の中を見てあれば。御物の具のかな物の。白々見えける所を。弓のはずをとりのべ。この葉をあつくはきか

け。さらぬ牀にてゐたりしに。つゞく兵者あやしめ。かたらひよれば二人。伏木のうへにあかり。とうとうとふみならして。そも何ものか今まで。此木のほらには有へきそ。あやしきさまにの給ふは。いかさま(6才)

景時助延長に。こゝろを置せたまふかと。とかくちんずる処に。正八幡のちかひかや。この木のほらよりも鳩一番立出てこくうをさしてとんでゆく。其とき二人ちからを得。あれ見給へやかた。人のあらんす木のほらに。今まで鳩の有へきか。かたきはかうこそ落つらん。とくおつ付や人々と。大せいいつわものを。筋なきかたへをしへやり。君をひつたて奉り。真鶴かうらまで。御供申せし心さし。やはかはわすれ給ふへき。その時頼朝。我よに(6ウ)

出る物ならば。いのちのおんを忘れしとかへす。もの給ひし。たとひおかす科ありとなとかは御めんならざらん。御身のちの景時に此事かたりたまひてせせうかなへてたひ給へ。「コトハ」景末きいて。それかし存の事にて候。ちもろともに御前にて。よきやうに申へきにて候。御心やすくおほしめせといひければ。助延きいて。あらうれしや候。去ながら母にしらせ申さんとて。簾中に立入此よしかくと仰ければ。「クトキ」母は夢ともわきまへず。頓てきえ入。たまひけり(7才)

。河津とのにはなれ参らせし其時は。露の命もおしからず。消うせばやとは思ひしか。兄弟にめかくれ。今又かゝる身とあれば。いつかかれら成仁し。助延の便にもなりもやせんと仏神に。きせい申せししる

しもなく。今更かゝる思ひをせんと。「フシ同」知らずやと。兄弟の若共を。弓手馬手の膝にをき。をくれの髪をかきなて。いかに二人の若共よ。祖父伊藤の科により。鎌倉殿へ。召上せ。ころさるへきにあるそとよ。何とてきみにはかほとまで。ふかきてきをはなしつらん(7ウ)

。さてわか共をさきにたてみつからは何となるへきと。りうていこかれ給ひければ。二人の若も。もろともになくより外の。事はなし。「コトハ」源太物こしより申けるは。御歎をうけ給はつて涙にむせびて候。さりなからはは御使の身にて候程に。はやとく。と云ければ。母上きこしめされて。けに。御道理にて御座さふらふ。さりなからわかれのかなしきにかやうに申さふらへ。今はちからに及はずとて。二人の子共をいてたせ。供のもの共いつよりもきらべやかにこしらへ。父もろ(8才)

ともに打つれてかまくらへ行そあはれなる。いたはしやは上は。あるにあらぬ心にて。中門まで出させ給ひ。兄弟の若ともか行つるかたを見給へは。「イロ」雲行客のあとを埋み。おもかけたにもこのらねは。おもひのほか。わか行。「クトキ」霧にまよへるかりかねのなく音もわれをとふらふか。よしなや今はおもはしと。常のところ立帰り。かれらか住しところの障子をあけて見給ふに。つねに手なれしもてあそひ小弓に竹馬作り太刀(8ウ)

。「フシ同」作り刀の。いつの間にはやかた見とは。なりたるや。いたはしや母上は。せめておもひのあまりにや。女房たちを近付て。かた

り慰給ふやう。叶はぬうき世の有様を。なげくへきにはあらね共。一代教主の釈迦如来も。子にはまよひの。親のやみらごいちやうしとときたまふ。ましてや申さん人間は。あまた持たる子をたにも。一人にをくるれば。みなにわかるゝ心地あり。我はたぐゑもなでしこの。二人か中にもし独り。いかなる事もあるならば。何となるをのひとつ松たくゑいかにと思ひし(9オ)

に。かれらにわかれて母独り。思ひこかれていきても。あすまで命なからへん。此夕暮にをとつれの。聞まほしやとの給ひてきぬ引かつき。うちふしてりうていこかれ。給ひけり。「コトハ」去間助延は。としよのひつじのあゆみ。ひまゆく駒のをのつから。いそかぬ旅とおもへとも。その日の酉の刻にはや鎌倉につきにけり。その夜は梶原か宿所にとまり。二人の子共を左右にをき。よもすからかいしやくし。

定なき世を案するに。実々心に任せぬ別の道とおもひきる(9ウ)

。親子の契りもけふまてと。あふ時よりも定りぬ。なげくはまよひの凡夫なり。さとり則仏にてあふもうれしかるましい。わかれもいかゝうかるへきと。おもひきつてまします処に。景末申けるやうは。なふいかに曾我との。某御まへにてこの子細を申とも。このまゝ御免は候まし。御対面も候らはゝ。よきやうに申へきにて候。とくいであゝせ給へと云ければ。兄弟は是をきゝ。いとけなき心にも。今が最後とやおもひけん。「クトキ」たかひにめと目と見合て。なくより外の事は。なし(10オ)

。なかぬも親はかなしきに。ましてかれらを見るよりも。「フシ同」

父かこゝろは。かきくれて覺す落る。涙かな。「コトハ」かくてあるへき事ならねは。景末御前に参る。頼朝御覽して。あれはいかに景末。何とて昨日はかへらぬぞ。かれらはいかにと仰ければ。召ぐして参たるよしを申。時刻うつしてかなふましい。油井の汀に引すへ。くびを切て捨へきなり。はやとくゝと仰ければ。景末かさねて申へきやうのあらずして。我か宿所にそかへりける。いたはしや助延は。二人の子共の給ふやう。すけのぶ(10ウ)

過去に科ありとも。実子ならねはよもむくはじ。伊藤河津か罪科も。今養育をうけされは何のむくいか有へきぞ。たゝねかはくは神仏。守給ひて兄弟を。たすけてたはせ給へやと。祈念もいまたおはらぬにはや景末はかへりけり。助延急立出。上意はいかにとへは。源太涙にむせびつゝ。あら口おしや候。せめて御対面も候らはゝ。余所の訴訟をも頼むへきに。此まゝゆゑの汀へ御供申。くびをきつて参らせよ。

若君様の御教養に報せんどの。御ぢやう(11オ)

にて候と。申もあへぬ処に。「カ、ルツメ」又お使そたちける。「同」曾我の一満箱王丸をとくゝきつてまいらせよ。時刻うつらは景末も。同罪科たるへしと。重て御諒の候と。かたり捨てそ帰ける。「フシ同」曾我も源太も兄弟も。あまりの事に。肝もきえむね。ふさかりて。こゑ出す。「片ツメ同」実々梅檀は。二葉よりもかうばししくしといふ鳥はちいさけれと。虎をとる徳あり。かれらはいとけなければ共儀によるめいをかるんじ。高名を家につたへんと歎けしきもなかりけり。兄弟(11ウ)

申けるやうは。いかに候ちよごせん。いそぎ乗もの給はれ。油井の汀

へ出へきなり。もしやの頼の有にこそ。しはしもかくてありたけれ。

又お使の立ならば。景末の御ため。しかるへくも候ましい。とても叶はぬもの故に。かまへてなげかせ給ふなよ。父御せんといひければ。

曾我は子共にいさめられ。こしきしよせて兄弟のせ。ゆいの汀へ出けるか。「フシ同」おつる涙に目かくれて。道もさたかに。見もわかすしとろ。もとろと。あゆみけり。「コトハ」鎌倉内の貴賤上下。曾我の一まん箱わう丸の最後の(12オ)

ていの哀さよと。袖をしほらぬ人そなき。かくて汀に着しかは。しきかわしかせこしよりおり。今か最後候か。きられて後に我々は。いかなる所へ行へきそ。をしへてたはせ給へや。父御せんと云ければ。まだようせうの者共か。最後をしらぬ哀さよと皆なみたをそなかしける。助延さしよつての給ひけるは。今がさいごよ兄弟よ。きられてのちに汝等は。祖父伊藤の入道と。父河津の三郎と。ひとつ蓮に生るへし。必ず死て行者は。仏のお前に参るなり。「ツメ同」先初七日は(12ウ)

秦広王。本地は不動明王なり。二七日は初江王。本地は釈迦にておはします。三七日はさうてい王。本地は大聖文珠なり。四七日は五官王。本地は普賢菩薩なり。五七日は炎魔王。本地は地藏ぼさつなり。六七日は變成王。本地は弥勒菩薩なり。七々日は泰山王。本地は薬師如来なり。百ヶ日は平等王。本地は観世音。一周忌は都事王。本地は勢至菩薩なり。第三年は。五道転輪王。本地は阿弥陀如来なり。七年きは

阿闍仏。十三年は大日如来。三十三年は(13オ)

。虚空蔵菩薩なり。かくのことくの仏たち。もろくのひぐわんをおこし衆生を斉度し給へり。いとけなければ汝等は。作る罪のなきにやり。かゝる仏の御前に。参るへき事共は。うたかひさためて有ましい。かまへてふかくにみゆるなど。さも高声にの給へ共。みれば余りの不便さに人めもさらにはぐからず不覚の涙をなかさる。「コトハ」かやうに時刻を移す処に一つのよろこひ候らひけり。三浦の義盛。宇都の宮の友綱。千葉のすけつねたね。此人々を先として。東(13ウ)

八か国の大名小名。訴訟のためにれつさん申也。源太とのもそが殿もそこつにきらせ給ふなど。使をたてさせ給ひ。をのく御所へお参りあつて申上られけるやうは。曾我の一満箱王丸をちうせらるゝ由を承る。まだ幼少の者共に。何ほどの事の候へき。たすけ御置候へかしと。各申されたりければ。頼朝聞召れて。誠にめんくの日比の忠節。いつのよに忘れ候へき。去ながら皆々存のことく。伊藤の入道助親につらくあたられ候らひつる。其時の心には。かれら(14オ)

程の者を。千人きつてもあくへきか。扱はめんくは。伊藤に頼朝を思ひかへ給ふか。口惜さよと仰ければ。れんさんの人々も。重て申へきやうのあらすして。みなく屋形に帰らせ給ふ。助延は此事を汀にて伝へき。扱はいかなる人の御申成共。叶ふましいと思はれければ。草の陰なる助親に恨ことをせられける。金は砂にまはれ共くつる事の候か。君はまさしき清和のなかれ。一旦おちぶれ給ふとも。「カ、ルフシ」末に頼をかけ申。「同」不忠の心。なかりせはかゝる。

うき目によもあはし。北条殿は。きみの(14ウ)

為。不忠の心なきにより。君を簪に取給ひ。今は子孫も。とみさかへかたを。ならふる人もなし。浦山しの北条や。あらうらめしの助親やと。過し昔を。うらみしははかな。かりける。次第也。「コトハ」扱有へきにてあらされは。はや切給へ源太殿。扱々母か方へは何とも申ましきかと。涙とともにの給へは。兄弟此よし聞よりも。さん候心に懸る事とは。よはひかたむきおはします。母こをさきに立參らせ。御跡をもとい申さんと思ひしに。思ひの外に先たち申。跡にてものを思はせ申さんこそ。よ(15オ)

みぢのさはりとなるへけれ。去ながら今こそか様に有とも。来世にては一蓮とやらんに生相申へし。叶はぬ事をさのみに。歎かせ給ひ候なと。「クトキ」母上の御心をも。なくさめ給へ父こそんと。おとなしやかに云ければ。「フシ同」きせんくんじゆの。人々もみな。涙をそなかしける。扱有へきに。あらされは。はや切給へ。景末念仏申せ。兄弟と。懇にすむれば。幼なきこゑを上。南無阿弥陀仏。みた仏と。十返計唱ふれば。景末も思ひきり。太刀取上ぬき持て。あゆみよりて。見てあれは。いつくにかたなを(15ウ)

打かけて。切へきやうの。あらすしてもとの。座敷に。なをりけり。「コトハ」助延御覽して。なふ何とてきらせ給はぬそ。さん候一定きりそんじつべう候。なにかしか内に。吉内兵衛と申てふてきの者の候。こなたへまいつて兄弟の太刀どり申せとて。かたはらよりも呼出す。助延御覽して。なにかしか子にて候者を。み内の人の手につかけ。きれ

との仰はくちおし。何迄も候らはす。なにかしか手につかけ。よみぢをかろくすへきなり。うれしいか一満。座敷になをれ箱王と。捨たる太刀を取上。あゆみよらせ給へは。「カ、ルフシ」我おとらしと(16オ)

手を合。「同」父にきられん嬉しや。兄なれば。一満まづさきにとそすゝみける。箱王は我をまづ。とくくきらせ給へとて。左右の袂に取つきて。むつまじけなる。有様を何に。たとへん方もなし。「コトハ」か様に時刻をうつす処に一つの悦候らひけり。ちぶの重忠は。筋かい橋の屋形を出。はま表を見給へは貴賤くんじゆをなす。何事にやととい給へは。そがの一満箱王丸を誅せらるゝと申す。是はかねてもきいつる事。源太殿もそか殿も。そこつにきらせ給ふなど。使を立させ給ひ。御身は御前へお参りあつて。申(16ウ)

上られける様は。只今出仕仕とて。はま表を見て候へは。貴賤くんじゆをなす。何事にやと尋て候へは。そがの一満箱王丸を誅せらるゝ由承る。まだ幼少の者共に。何程の事の候へき。扶御置候て。なにかしに御預け候へかし。かれら成仁仕り。もしも不忠を存ぜは。なにかしか手につかけ。くびをきつて参らすへし。此度の命を御扶らは。時の面目たるへき由申上させ給へは。頼朝聞召れて。なふいかに重忠。か様の事を申さねは。只頼朝かひがことゝ思ひ給はんするほとに。語て聞せ申へし。頼朝流人たりし(17オ)

時。北条蛭か小嶋へなかさされ。伊藤北条兩人に守護せられ。「サンクトキ」廿一年の。春秋を送りむかへて過しとき。「フシ同」伊藤か娘

に。いひかはしはいしよのうきを。なくさみぬ。かくて日数をふる程に。若を一人まうけつゝ。うれしさたくる候らはす。かまへて果報目出度。正八幡の加護有て。家をおこし名を揚て。天下の主と。あふがれよといつき。かしづき。日を送る〔片ツメ同〕かゝりける処に。伊藤の。入道助親は。三とせのおうばん勤て。都より下りしかはや此事を聞付。たがはからひに頼朝をは聳に取てありけるそ(17ウ)。平家の御恩を此間。天山にかうむり妻子をふちし身をたてゝ。仁となる助親か世になしものを聳にとり孫をまうくる物ならば。老の。くげんに縄かゝり。うきめを見んずるかなしけれと。娘をは取返し山木判官聳にとり。みつに成し若をは。伊藤か瀧にしつめしは情なかりし次第也。頼而頼朝をも。討へきに有しを。伊藤の九郎か情にて。命計はとにかくになからへけるそふしきなる。恥の上の歎。なげきの恥辱をは筆にもいかて尽すへ。き其時の心には。哀伊豆をしたかへ。野心のものを(18オ)亡し思ひしらせはやと。明暮仏神にきせい申せししるしにや。日本国の主となり山木伊藤を亡し。会稽の恥を雪也。されは古き詞にも。毒虫をは。なづきをわつてずいをとり。てきとうをは。根をたつてはをからせと。申事の候そや。かれらは正しき伊藤か孫。此世に扶てをかん事。虎の子を野に放し。龍に水を。与ふるににたるへしよくきゝ給へ重忠。自余の事にて候らは。何かは背申へき。此事にをいては。思ひもよらぬ事成へし。時刻移して叶ふましいそはやとくきれとそ(18ウ)

仰ける〔コトハ〕重忠重て申上られるやうは。御誼を委承り涙にむせひて候。人間不定のならひにてはやき報を存ぜず。不忠を致す伊藤こそ返々も口惜り候らへ。されは因果たちまち歴然たり。御物語に付て因果の道理を申上へし。今三じやうがさきかとよ。天竺ぐじなこくに。れうわうと申御門おはします。是かくれなき悪王たり。彼国にゐんねんはつしと申て。賢人の候らひしか。非道の勅を背とておや子三人誅せらる。今度はいんねん法師。大唐のしんの(19オ)ゆうわうに生れかはり給ふ。さて天竺のれうわうは。大唐のごめいしこうと申民のやつこに生かはり〔カ、ルフシ〕しんのゆうわうにきられ給ふ〔同〕是前生の。むくゐにてのかれ。かねたるわうしなり。されはかやうの。因果に。若君様もあへなく。むなしくならせ給ひぬ。さて三じやうは。ちんりんす。猶此念を捨給はて。ゐんぐわをかへりみ給はずは。たかひにうつつ。討れつ生々世々に尽すまし。哀此もの兄弟を。御扶。候らひて。ともに生死をはなるへき。便と。ならせ給へかし。いかにくと。申(19ウ)さるれととかく。返事も。ましまさす〔コトハ〕やゝ有ての給ひけるは。けさよりも八か国の人々の。訴訟有つるをも用ず。たゝ此事を頼朝にゆるさせ給ひ候へとて。さうなく用給はず。重忠承り。あら口惜や候。八ヶ国の人々の。訴訟ありつるその跡に。重忠か參。無用のせせうを申かかり。かなはて帰る物ならば。ちゝぶの家の不足。末代とても面目なし。君はまさしき征夷將軍にて。理非をたゞし国を守りたまふ身か。是ほととの訴訟をなとやかなへてたびたまはぬ(20オ)

。祖父伊藤は過し事。まだ幼少の者共に。これ程までの御罪科は有ま
しき事にて候。何迄も候らはす。かゝるせうを申さんと。思ひたつ
て候事。ちゝぶみやうけん大はさつにはなされ申。此度一門の運のき
はまる所なるへし。「カ、ルツメ」かれらをきらせたまはゝ。「同」
御まへにて腹きつて。いとけなき兄弟か。左右の手をひかへて。死出
三途を引渡し。あび大じやうのそこにある。祖父伊藤の入道と。ちゝ
河津をよび出し。二人の子共を手渡し。ふる傍輩のしるしにせん(20
ウ)

。いかに本田半沢よ。はまにくたつて兄弟か。最後のていを見て参れ。
いとま申て我か君と。刀のつかに手をかけ。思ひきられしあり様を。
ものによく／＼たとふれば。漢の高祖のたゝかいに。こうう合戦にか
けまけかんやうの陣をはつし。呂馬童を招け共。かたき恐れて近付ね
は。われと劔をぬきもつて。我かくびをかききり。かたきに渡すいき
おいもいま重忠のありさまもいかてかおとりまさるへき。「コトハ」
頼朝仰けるやうは。あらふしやうの重忠のせせうや(21オ)

。叶はずは腹きらんと宣ふや。前代未聞の事共かな。力及はず兄弟を
重忠に参らす。さりなからけさよりも訴訟有つる人々の。けにはう
らみも有ぬへし。心得給へとの給ひて下したぶこそ有難けれ。重忠余
りの忝さに。かうべをちに付給ひ。あら有難や候。只今のせせうかな
へてたび給ふ事。生々世々の間にやはか忘れ申へきと。うれし鳴にそ
なけれける。頼而御前を罷立。半沢をつかひ給へは。半沢はまに下り。
重忠の御せせう有て。兄弟の人々を御扶候(21ウ)

なり。源太殿も曾我殿も。はや／＼帰らせ給へと。たからかに云けれ
は。「カ、ルモンタイ」はまに集るのみならず。／＼きく人ことに
手を合せ。「フシ同」有かたの。重忠や。やさしの人の。心やとよろ
こばさるは。なかりけり。「コトハ」すけのぶ半沢と打つれ。二人の
若を引ぐし。しげたゝに参らせ給ひ。あらありかたや候。たゝ今の御
せせう有て。兄弟の者共かいのちたすけて給はる事。生々世々の間に
やはかは忘れ申へきと。「カ、ルフシ」あまりの事のうれしさに
「同」うれしなきにそなけれければ(22オ)

。重忠も。もろともによるこひのなみたを。なかさるゝ。「コトハ」
そのゝち助延申されけるは。今しはらく候らひて。御物語申たくは候
らへとも。ふる里にのこりたる。母かさこそなけき候はんに。先罷か
へり。此御ほうしのありさまをくわしく申きかせ。かさねて参り候は
んと。二人のわかをこしにのせ。ふるさとに帰らるゝ。こゝろの内
うれしさを何にたとへんかたそなき。いたはしや母上は。子とものお
もひにたえかねなきふしてましますところに。曾我とのも若達も。御
よろこひにて(22ウ)

たゝ今かへらせ給ふといひければ。母は夢ともわきまへず。ふしたる
所をかつはとおき。立出させ給へは。「カ、ルモンタイ」二人の若も
こしよりおり。母のたもとに。取つて。「フシ同」是は夢かや。
うつゝかや。夢かうつゝかとなくより外の。事はなし。やゝありて母
うへは。なみたとともにの給ふやう。此ほとは。けにむばたまの夜も
すから。なき明しつる。かなしみに。油井の汀できられしか。もしも

夢にやきたりけん。しゝたるものは。さありとも。父は夢にはよもき
たらし。あふうれしきの夢ならば。又や(23オ)

わかれも。有へきとおもひこかるゝ。心こそことわりせめて。あはれ
なり。「片ツメ同」やゝありて助延。はしめをはりの事共をくわしく
かたり給へは。母やめのと手をあはせ。あり難の事ともや。重忠の
ましますは。いかて二たひ逢へきとよろこぶ事はかきりなし。「ク
セ」されは有為のほうぶつた夢のうちのごんくわ。さて又むさのさん
じんは。かくのまへの七仏。えきろの鈴のよるのこゑ。返魂香のけぶ
りこそなき面影もうつらめ。「片ツメ同」是はたくあもなく鳥のあ
く(23ウ)

がれはゝのなげきしに。君のめくみのふかうして。科をゆるし理を
たゝしあふげは高きつくば山おいをもかへすまつかぜのみとり子なれ
はなき親の。きみに不忠の末なれはかくしそたてしいにしへのこゝろ
に今は引かへ。なげきはかへりよろこひの御さかもりと成にけり。さ
て兄弟の人々は。成仁年を重て。兄をば曾我の十郎弟を五郎時宗と。
かくれなきゆうしなり。親のかたき助恒を野にふし山にかくれ居てね
らひうかゝふありさま。よその見るめも中々(24オ)

。心くるしき次第なり。ねらふ所はどこゝそ。ばんにうとひらつか
大磯小磯まりこ川あみのいつしき小田原。このよをいででのやかたまで
三十八度ねらひ。終に本望とげつゝ。高名を家にのこしけり(24ウ)

【校異】

本曲の校異に使用した諸本は次のとおり。(内)内閣文庫本、(毛)毛
利家本、(打)打波家本、(藤)藤井本、(松)松村本、(直)直熊本

1オ ○助延―(直)ナシ ○東八か国の―(毛・打・藤・松・直)

それをいかにと申すに東八ヶ国の ○ありしとき―(毛・打・藤
・松・直)次に ○おほせけるやうは―(藤・松)の御ぢやうに
は ○頼朝にまして―(藤・松)何がしにましたる ○それをい
かにと申に―(藤・松)すぎにし ○討死し―(藤・松)うしな
はれ申し

1ウ ○東国さして落給ふ―(藤・松)おさ田をたのみ給ひしにたの
むこのもとにあめもりておさ田にうたれたまふ ○雪はふる―
(内)雨は降 ○にし近江―(打)ナシ ○にし近江さかり松の
あたりにて追をくれ奉り―(藤・松)みちにておくれ申し ○闇
に―(藤・松)山に ○義朝は長田を：討れさせ給ひ―(藤・
松)父うたれさせ給ひ

2オ ○北条ひるか小嶋へ―(直)伊豆国北条ひるが小島系、(藤・
松)此国へ ○伊藤北条兩人に守護せられ―(藤・松)ナシ ○
廿二年の―(内)廿一年の、(毛・打・直)ナシ、二十よねんの
(藤・松)

2ウ ○伊豆をしたがへ―(藤・松)いづの国をもつて ○しるのみ
ならず―(藤・松)しるのみならずあながらせいあしやうぐんの
せんじをかうふり

- 3オ ○助恒―(藤・松)と仰ければ ○子一満箱王とて二人の木の―(藤・松)二人の子一万はこわうとて ○頼朝聞召れて―(藤・松)よりともきこしめし何と申すすけつね ○左様に不忠はあらじと：はしめより―(藤・松)よりともに ○あらじとこそ思ひ候らへ―(打)あるましき事にて候
- 3ウ ○又申けるは―(藤・松)うけたまはり ○いかに景末―(藤・松)いかにかけすゑうけたまはれ ○子一まん箱王とて二人の者の候を―(藤・松)二人の子一まんはこわうとて ○助延か―(直)ナシ ○かしこまつて候とて御前を罷たち駒引よせて打のり―(藤・松)こまをはやめてうつほどに ○助延の宿所に立より―(藤・松)いそぎこまよりとんでをり
- 4オ ○たからかにいひければ―(藤・松)申す ○景末に對面し―(藤・松)ナシ ○源太聞て―(打・藤・松)さん候 ○御對面有へしとの：御罪科は候まし―(藤・松)御たいめんのあるべきにて候
- 4ウ ○の給ひけるは―(直)申されけるは、(藤・松)すけのぶおつるなみだのひまよりも ○物かたりの次而に―(打・藤・松)ナシ
- 5オ ○兄弟の―(打)二人のものゝ、(藤・松)二人のわかあはせて ○景時助延心を合申様―(藤・松)かげときすけのぶ二人心をあはせて ○伏木の中を―(藤・松)かたらいよつて二人ながらふし木の中を
- 6ウ ○この木のほらよりも―(藤・松)此木の中よりも
- 7オ ○それかし―(藤・松)仰のごとくそれがしもくはしく ○ちゝもろともに御前にて―(藤・松)御まへにてとりあはせいひければ―(藤・松)ねんごろにいひければ ○助延きいて―(藤・松)すけのぶはよろこび
- 7ウ ○河津とのに―(藤・松)やゝありてなみだのひまよりのたまひけるはかはつ殿に
- 8オ ○はやとく／＼と云ければ―(藤・松)まづ／＼のぼせ申され候へ御前にてよきやうに申べしそれにはなぬ物ならばおんしやうに申かへたすけ申べく候こゝろやすくおぼしめせとたのもしげにいひければ ○さりなから―(毛・打)ナシ ○申さふらへ―(藤・松)なげき候へ ○こしらへ―(打)出たゝせ ○父もろともに：あるにあらぬ心にて―(藤・松)かまくらへこそそのぼされければあらいたはしや助のぶあるにあらぬ心にて二人のわかをうちつれかまくらへのぼるぞあはれなるあらいたはしや母うへかずの女ばうたちを引ぐし
- 8ウ ○よしなや今はおもはしと―(藤・松)おもはじ今はよしなやと
- 9オ ○釈迦如来も―(藤・松)しやかによらいはつさうしやうだうしたまひても ○ましてや申さん人間は―(藤・松)かりていもといつし人千人の子をもちしが一人のわかれをさへみなにわかるといふありそれにんげんのならひにて ○一人にをくるればみな

にわかるゝ心地あり―(藤・松) izzれをわくる心なくあはれむ
はおやのならひなり

10オ ○凡夫―(藤・松) しゆじやう ○申けるやうは―(直・藤・

松) さしよつて申けるは ○候はゝ―(内・毛・打・直) 候はゝ
とり合 ○よきやうに申へきにて候―(藤・松) 御まへにてとり
あはせまたゑうせうのものどもに何ほとこの事の候べき御たすけあ
れと申さんによも御さいくはは候はし ○とくいであゝせ給へ―

(打) 御こゝろやすくおほしめせ ○云ければ―(内・毛・打・
直) 懇にいひければ、(藤・松) ねん比にすゝむれば ○兄弟は是
をきゝ―(内・毛・打・直) 兄弟此よし聞よりも、(藤・松) ナシ

○今が最後―(他本) 最後 ○たかひに―(藤・松) きやうだい
10ウ ○かれらを見るよりも―(毛) かれらが躰を見て、(打) かれら

かていを見るよりも、(藤・松) なげくを見るよりも ○油井の
汀に引すへくびを切て捨へきなり―(藤・松) ナシ ○景末かさ
ねて申へきやうのあらすして―(藤・松) げんだかさねて申べき
やうなくして御まへをまかりたち ○いたはしや助延は：祈念も

いまたおはらぬにはや景末はかへりけり―(藤・松) ナシ

11オ ○むせびつゝ―(内・毛・打・直) むせびつゝとかく返事もな
かりけりやゝありて申けるは ○源大涙にむせびつゝあら口おし
や候―(藤・松) おつるなみだにめぐれてさうなふへんじもな
かりけりやゝあつてかげすゑなみだをおさへ申けるはあらあさま
しや

12オ ○出けるかおつる涙に：しほらぬ人そなきかくて―(藤・松)
出たりけりゆゑの

12ウ ○こしよりおり―(打) なをり ○をしへてたはせ給へや父御

せんと云ければ―(藤・松) ちゝごぜんおしへてたべと申す ○
皆なみたをそなかしける―(藤・松) そでをぬらさぬ人ぞなき
○死て行者は―(藤・松) 行ものは

13ウ ○ふかくに―(藤・松) みれんに ○人めもさらにはゞからず

不覚の涙をなかさるゝ―(藤・松) 又わかどもにうちむかひふか
くのなみだせきあへず ○三浦の義盛：此人々を先として―(藤
・松) ナシ

14オ ○と使をたてさせ給ひ：曾我の一満箱王丸を―(藤・松) 御よ

ろこびに申なし参らせんとつかひをたて給へば助のぶ此よしきこ
しめしあらうれしや候此人／＼どうしんにせう申させたまはゞ
御もちいなき事よもあらじとたのもしくおもはれるこそはかな
けれ人／＼君の御前に参りそがの一万はこわう九二人のわかをめ
し出され ○まだ幼少の―(藤・松) 御てうてきのすゑなれば御
さいくはは御だうりさりながらまだゑうせうの ○たすけ御置候
へかしと―(藤・松) 御たすけ候て助のぶにあづけおかせ給へか
しと ○誠に―(藤・松) 仰のごとく ○其時の心には―(藤・
松) 其時のこゝろを思ひ出し候へば

14ウ ○みな／＼屋形に帰らせ給ふ―(藤・松) 御前をまかりたち我
がしゆくしよにぞかへられける ○扱はいかなる人の申成共叶ふ

ましいと思はれければ―(藤・松) あらあさましやとそんずれば
15オ ○扱有へきにてあらされははや切給へ源大殿扱々―(藤・松)

すけのぶなみだをととめさてくゝいかにきやうたいよ ○涙とと
ものに給へは兄弟此よし聞よりも―(藤・松) とひ給へばきやう
たい申けるやうは

15ウ ○去ながら今こそか様に有とも来世にては―(藤・松) よしや
さりながら今こそちぎりうすくともしゝては ○きせんくんじゆ
の人々もみな涙をそなかしける―(藤・松) すけのぶもかげすゑ
もきせんくんじゆの人までもそてをしぼらぬ人ぞなき ○太刀取
上ぬき持てあゆみよりて見てあれば―(藤・松) たちおつとりた
ちよれば

16オ ○さん候―(打) ナシ、(藤・松) げんだきひていかにぞんぢ候
てもおつるなみだにめぐれて

16ウ ○何にたとへん方もなし―(藤・松) 見るになみだもせきあへ
ず ○か様に時刻をうつす処に一つの―(毛) かゝる哀れをもよ
ほす所に又、(打) かゝりけるところに又 ○一つの悦候らひけ
り―(藤・松) ナシ ○一満箱王丸を―(藤・松) 一万はこわう
丸二人のわかをめし出され ○きらせ給ふなと―(藤・松) きら
せ給ふな御よろこびに申なし参らせんと ○御身は御前へお参り
あつて―(藤・松) 我か身は御所へ参り君の御前にかしこまり
17オ ○一満箱王丸を―(藤・松) 一万はこわう丸二人のものをめし
出されて ○扶御置候てなにかしに御預げ候へかし―(藤・松)

御たすけ候てすけのぶにあづけおかせ給へかし ○参らすへし此
度の命を御扶候らはゝ時の―(藤・松) 御めにかけ申べきにて候
たゝ今の御ざいくはを御ゆるし候はゞいへの ○するほとに―
(藤・松) ずる間ながく敷は候へども

17ウ ○北条蛭か小嶋へなかされ―(藤・松) ナシ ○廿一年―(藤
・松) 廿よねん ○いひかはしはいしよのうきをなくさみぬかく
て日数をふる程に―(直) ナシ

18オ ○妻子をふちし身をたてゝ―(藤・松) ナシ ○なげきの恥辱
―(内) なつきのちりよく、(直) 欺の上の恥辱、(藤・松) なけ
きの中のちじよく ○筆にもいかて尽すへき―(藤・松) ふでに
もことばにもつくしがたくぞおほえし ○哀伊豆をしたかへ野心
のものを亡し思ひしらせはやと―(藤・松) いづの国をもつてい
とうの入道すけちかに思ひしらせばやと

19オ ○重忠重て申上られけるやうは御誼を委承り―(藤・松) しげ
たどうけたまはりそがの一まんはこわう丸きつてもあかぬ御うら
みうけたまはつてしげたども ○人間不定のならひにてゝ返々も
口惜う候へ―(打) ナシ、(藤・松) さればいんぐはたちまちれき
ぜんたりはやきむくひをしらずしてふちうをいたすいとうこそか
へすくも口おしけれ ○されは因果たちまち歴然たり―(打)
ナシ ○御物語に付て因果の道理を申上へし―(毛) 御物語の次
に因果の物かたりをかたつてきかせ申べし、(直) 御物語の序て
に因果の物語を申上ん、(打) 御物語の次てにいんくわのとうり

を語てきかせ申さん、(藤・松) こゝにいんぐはの物がたりをか
たつてきかせ申べし ○御門―(内・毛・打・直) 御門一人

19ウ ○ゆうわう―(藤・松) ちうわう ○生れかはり給ふ―(藤・
松) うまれかはり給ひしはいんぐはのむくはんためなり ○むく
るにて―(藤・松) いんぐはにて

20オ ○の給ひけるは―(藤・松) よりとも仰けるやうはしげたゞね
んごろにのたまふ程にたすけたくは候へども ○ゆるさせ給ひ候
へとて―(内・毛・打・直) ゆるさせ給へと仰あり、(藤・松) ゆ
るし給へとたまひて ○あら口惜や候―(内・毛) 口おしの御
誕や候今朝よりも、(打・直) 荒口惜や候けさより、(藤・松) あ
らくちおしや候さりながら ○ありつるその跡に―(藤・松) あ
りてかなはぬあとに ○不足末代とても―(藤・松) なおりすゑ
の世までも ○たびたまはぬ―(藤・松) たまはぬぞまさしくせ
んじやうに出ゆみをひきやをはなしたるものだにもつるをはずし
かうさんするはならひなり

20ウ ○まだ幼少の者共に―(藤・松) とがもなきものどもを ○手
をひかへて―(内) 手を引候て

21オ ○ぬきもつて―(藤・松) ひつさげて ○ありさまも―(藤・
松) ふるまひも

21ウ ○さりなから―(藤・松) ナシ ○下したぶこそ有難けれ―
(藤・松) 御めんあるこそめてたけれ ○余りの忝さにかうべを
ちに付給ひ―(藤・松) うけたまはり ○うれし鳴にそ―(内・

藤・松) あまりの事の嬉しさに嬉しなきにそ ○頓而御前を罷立
―(藤・松) いそぎ御前をたち給ひ半三をちかづけせう申かな
へたりげんだ殿もそが殿もはやくかへり給へと ○半沢はまに
下り：たからかに云ければ―(藤・松) ナシ

22オ ○若を引ぐし―(打) 子ともをさきにたて

22オウ22ウ ○すけのぶ半沢と打つれ：御物語申たくは候らへとも―
(藤・松) やゝあつてすけのぶ半三にあひてのたまひけるはふる
さとを出しよりふたゝびかへるべしとはゆめくおもはざりつる
に今よろこびにてかへる事しやかのみりのみこゑよりもなをあ
りがたくこそ候へたゞ今もまいり此ほうしの御礼申たく候へども
22ウ ○御物語申たくは候らへとも―(打) 是に有度候へとも ○ふ
る里にのこりたる―(打・藤・松) かれらか ○母か―(他本)

母にて候者 ○先罷かへり此御ほうしのありさまをくわしく申き
かせかさねて参り候はんと―(藤・松) いそぎまかりかへりしげ
たゞの御せせうにてふしぎの命たすかりたるよし申きかせやがて
参り候はんと ○二人のわかを―(内・毛・打・直) ねんころに
の給ひて二人の若を、(藤・松) ねんごろにいひおくり二人のわ
かを ○ふるさとに―(打) いそぎ家路に ○こゝろの内の―
(藤・松) ナシ ○なきふしてまします―(藤・松) たゞうち
ふしてなき給ふ

23オ ○ふしたる所をかつはとおき立させ給へは―(内) ナシ ○
是は夢かや：なみたともへの給ふやう―(藤・松) むつましげ

なるありさまはよそのたもとぬれぬべしいたはしや母うへは夢
にみちゆくこゝちして

23ウ ○やゝありて助延はしめをはりの…よろこぶ事はかきりなし―

(藤・松) ナシ ○あくがれ―(藤・松) つれなき

24オ ○君のめくみのふかうして…みとり子なればなき親の―(藤・

松) ナシ ○まつかぜ―(毛・打・直) まつかげ ○曾我の十郎

―(藤・松) 十郎すけなり ○助恒を野にふし―(毛) 祐経に伏

29ウ ○小田原―(藤・松) おだはらゆさかのとうげはこね山

(景清)

去間頼朝の御代をめされたる由来を委たつぬるに。御舎第九郎御さう
し。御心たけくわたらせたまふゆらひなりとそきこえける。かくて建
久元年に。君はしめて京上りまし。二度の御上洛。おなしき次で
に南都の供養をのべさせ給ふ。恒例なればちよぶとの先陣とこそきこ
えけれ。さる間重忠。本田の次郎をめされ。いかに近恒承はれ。今度
も重忠か。先陣を給はるなり。みやこのみにかぎらず。五畿内の者と
も(1オ)

。だうぞく市をなすときく本田との御誕なり。近恒うけ給はり。わつ
はに取てはたれ。そ。堅田のくまわうほうらい丸。福田の万歳を先
として。わつは廿人に赤地のにしきのひたれきせ。丸巻の太刀かつ
かせ弓手のわきをそ通しける。地白廿人に折えはしをきせ。白柄の長
刀をかづかせめてのわきをそとをしける。ちよぶ殿の御せいは。大せ

いはことくしよとて七千余騎に過ぎりけり。かまくら殿の御せいは
十万余騎とそ(1ウ)

聞えける。先陣も後陳も。平安城へを御立あり南都へこそはいそか
れけれ。かくて東大寺四方の門は。結城なかぬま。小山宇津のみや。
をのくかため給ふ。其中に取分。手かいの門こそ大事なれとて。

ちよぶ殿の四天保昌を。あさむく程のつわものを。「カ、ルフシ」五
百余騎にてかためらる。「同」かくて南都の。供養はまつ最中と。聞

えけり。かゝりける。ところにも。あはれをとめしは。平家の
侍大将に。悪七兵衛。景清にてことにあはれ(2オ)

を。とめたり。あはれよの中に。貧ほとつらきことあらし。したし
き人にはとをくなり。うとき人にはいや生まれ。ひんじやのいゑに。

生るゝほとつたな。かりける。事あらし。承はれは。かまくら殿。南
都のくやうときいてあり。法会の庭とは存つれ共。主君のかたきで。

ましませはしのひ。みやこへ上りつ。頼朝を。一刀きり申。大臣殿
の。きやうやうに。ほうぜばやとおもひけれは。尾張の熱田を。立出

てしのび。みやこへ。上りけり。「コトハ」清水坂のかた(2ウ)
はらに。あこわうと申て遊女の候らひけるに。浅からず契りけれは。

かれか宿所に立よつて。南都の次第をくわしくとふ。さる間あこわう
は。契るなさけのわりなきに其まゝにそかたりける。景清なゝめに悦

て。南都へこそはいそきけれ。人の心のほとをも。引見はやと存すれ
は。いでたちやうこそおもしろけれ。青黄にはひの腹巻へを。草摺長

にさつくととき。戻のころもを上きて。上帯しつかとしめたりけり。

長絹の袈裟をもつてほうかぶり(3オ)

をつかまつり。大臣殿より給はつたる。瘤丸と云打刀を。まへあがり
にさすまゝに。ぬつたりしけいちを。あいかわにて緒をたて。つめは
きにはいたりけり。筑紫みの長刀の。八尺計ありけるか。ぬけはたま
ちるはかりなるを。「カ、ルツメ」さやをはきつとはづひて。「同」
弓手の小脇にかいこふで。ちゝふ殿のかためてましますてがひの門を
景清はさあらぬ躰にて通りける。ちゝふ殿の御内なる。本田の次郎か
是を見て。あらけなふこそとかめけれ。あれはいかなる人さうぞ(3
ウ)

。是はちゝふ殿のかためてまします。手かひの門とはしらざるか。そ
れよりもとれとよ。景清はきくよりも。あつことなしと存すれば。
長刀までに取なをし。ちかふよつて。小こゑたつて申やうなふ。くる
しうも候らはす。東大寺のかたはらに。住ゐつかまつる。筒井の淨妙
めいしゆんなりやとをしてたべとそ申ける。幕のうちなるちゝぶとの。
此よしをきこしめし。大まくつかんて打上。あらふしきの事共や。
たゝ今のなまりのこゑは北陸道のかたはらの。なまりのこゑと(4
オ)

きいてあり。それよりもとれといへ。運命尽はてて。少共たてつく
物ならば。はからへとの御誕なり。承ると申て。其せいは三百余騎。
太刀長刀のさやはつし。御とまりあれとおつかくる。景清は見るよ
りも。あらはれぬると存つれば。はいたりしけいちを。とあるところ
にぬきすて。三百余騎かまん中にて。長刀の切手には。こむ手なぐて

ひらく手。石づきをかいつかんで。はらりくとないだりけり。くつ
きやうのつわもの共を。三十騎計まつしころに(4ウ)

きりふせのこりのつわものともにいたでうすて負せて。四方へはつと
おつちらし。霧の法をむすんで。我か身にさつと打かけて春日山へつ
つと入世間の躰をきゝゐたり。「コトハ」景清心に思ふ様。よしく
こゝにてねらひ申さすとも。明日はかまくら殿。般若寺へ御参りと聞
てあり。山伏の姿をまなひ。ねらははやと思ひ。かきの鈴懸しかまの
頭巾。まゆはつかに引こふて。たけとひとしき笈をかけ。おのまさか
りを打かたけ。嶺入しける山ふしを。廿人計友とし。般若(5オ)

寺の御前にて。鎌倉との御参り今やをそしと相待る。去間ちゝふ殿。
此よしを御覽して。あらおびたゝしの山伏達や候。めんくはどこ山
ふしと。みなされて候そ。重忠はおく山ふしと見ないたり。おくに取
ても。松嶋岩嶋平泉。あげずか岩やそとのはま。大峯なんとをぎやう
じ。磯につかれたる山ふし達と見ないたり。先よりも九番目。跡より
も十二番目に。いかにもせいはから高にて。なまめいたる客僧を。ま
ことの山伏と思ひてふかくかくな(5ウ)

よかたく。あれこそきのふ手かひの門にての。ひげ衆の類なれ。
たゝおつめ搦捕て。「カ、ルツメ」君の御めにかけ申せ。「同」本
田との御誕なり。近恒承はつて。其せいは五百余騎。太刀長刀のさや
はつし。おとまりあれとおつかくる。景清は見るよりも。あらはれ
ぬると存つれば。かけたりしおいをは。とあるところにかつはとすて。
あざ丸をするりとぬいて。五百余騎を打破り又。霧の法をむすんで。

わが身にざつとうちかけて。人よりさきに景清は。忍ひ(6オ)

て京へ上りけるかの景清かふる舞をほめぬ人こそなかりけれ
 「コトハ」あらむさんや景清。今はせんほうつきはて。我が身をだいて立
 たりしか。いかにもして主君のかたきを。うたはやとおもふころの
 内こそ哀なれ。爰にひとつの物語あり。一とせ高倉の宮。三井寺をた
 のふて行幸ならせ給ひしとき。三井寺なんなくたのまれ申。南都へて
 う状をこす。返蝶を大衆せんぎ有て。かのしんきうにかゝせられける
 に。清盛を平家のそうかふ。武(6ウ)

家のちんがいと書てをくる。清盛大きいからせ給ひ。いそぎ討手を
 上せんとして。さんぜう坊か討手を。難波瀬の尾か給はり。一千余騎を
 そつし南都へせめてそ上りける。去間南都の大しゆたち。さんぜう一
 人にたのまれ。清盛とてきになり。かなふましいとせんぎして心かは
 りをし給ひけり。「クトキ」あらむさんやさんぜう坊か。たのみ申大
 衆はこゝろかはりをし給へは。いまはせんほうつきはて。こつがひに
 んのまなびをし(7オ)

。真の漆を買とつてつぎ目五たいたに。しつかとさし。袋うらかへしき
 るまゝに。破たる笠をくびにかけ。ほそき杖を便とし。「フシ同」南
 都をは。立出てふて。みやこへ。上りけり。ならさかや。般若寺の。
 あたりにて。討手のせいにそ行あひける。日比はかたをならべ。ひざ
 をくみしはうばいたち。まのあたりを通れとも。あれはいかに。さん
 ぜうかと目かくるものも。なかりけり。それも心か剛なれば。鰐の口
 をのかれて。鬼神か門(7ウ)

を立出て。なるみかたに下りつ。医師をもとめて療治をし。本のこ
 とくに平愈あつて。かくてさんぜうくま野にこえ。新宮の十郎。行家
 の御手に付申。治承四年の夏の比。熱田のみやの。願書の時に。三乗
 坊とそ書たりける。其後信濃に。下りつ。木曾殿の。御手に付申。
 北国となみ山。はにふのみやの。願書の時。三乗坊とは書ずして。其
 名をかへて。木その大夫。かくめいとそ書たりける。あはれ漆の(8
 オ)

。なかりせは。さんぜう坊が。命はあやうかりつるものぞかし。かく
 申景清も。それにはすこし違ふまし。こつがいにんのまなびをして。
 ねらははやと思ひて。四条の町に立出て。しんの漆を買取て。つぎ目
 五たいたにしつかとさす。夏のうるしのものうさは五躰をしむるそ。た
 えかたき。むさんや景清は。わか身をきつと見て。かくなりはつるも
 たかためそ。主君のとくと。思へはうらみとはさらに。思はず。「コ
 トハ」いかに二相をさとの重忠と申とも(8ウ)

。彼景清か有様を見るへうはなかりけり。みのうらかへしきるまゝ
 に。清水坂のかたはらに。百四五十人ならびゐたる。こつがひ人にま
 じはりて。なふ人なみ／＼にこなたへも。「カ、ルフシ」施行たべよ
 とこふ時ぞ。「同」いと昔を。こひ衣。／＼袖は。涙に朽ぬへし
 「コトハ」さる間ちふ殿。此よしを御覽して。本田半沢をめされ。
 いかにかた／＼承はれ。かゝる法会の庭には。寸善尺魔と申て。大事
 の事の候そ。あのやうなるこつかひ人は。時の調子をそむくなり。ま
 づ春は(9オ)

甲乙にて。双調であらふず。夏は丙丁にて。黄砂であらふず。秋は庚辛にて。平調であらふず。冬は壬癸にて。盤砂であらふず。土用は戊己にて。一越にて有へし。是によつていし陰陽にも。双黄平盤一とつかひ候。今は秋にて候ほとに。平調であらふず。あらふしきやたゞ今施行たべと乞つる。こゑをきくも平調なり。弓手の眼は。腎の臓より通し。其色くろくみゆる。めての眼は。肝の臓より通し。その色青く見ゆる。相剋相生の(9ウ)

かたち。まさしく御身は「カ、ルフシ」こつがひにんではなくして
〔同〕平家の侍太将に。悪七兵衛。景清と見たはちゞぶかひかこと
か「コトハ」かくいふか無念ならば。重忠きみに御暇申。武蔵に下りてあらんす時。大御所へ忍ひ入。ねらひたくはねらひ候らへ。重忠かあらん程は。ふつと叶ひ候ましいと。まつしろにいはいはれ申。あつはつかしと存ずれば打うつぶいてぞゐたりける。景清心に思ふやう。我等かちゞの上総の守を。元服の親にたのませ給ひ。忠は(10オ)
我等か家の忠。重はちゞの重なり。ゑほし子とえほし親は。七生までのきゑんと承はつて候に。なさけなふ重忠の。一度見ゆるし給はぬ所は無念なり。其儀にて有ならば。とてもしなふず我か命。重忠とさしちかへ。とにもいかにもならばやと。思ふ心を先として。「ツメ
〔同〕あさ丸をするりとぬいて。みけんにさしかさしおとまりあれとて追かくる。ちゞぶ殿御らんして。心得たりやとの給ひて。四尺二寸のかうびらぬいて。渡りあふて見え給ふ。あやうかりつる処に。御馬(10ウ)

まはりの人々か。一度にはらりと折立て。重忠を。おしへたて奉り。景清中に取こめて。火水になれともうたりけり。ぢたひ景清は。心は剛なり力はずよし持たる太刀は劔。しんけいか述はならふつ。手をくたいてぞぎつたりける。馬にとつて切所。尾口とこわき。おのうへさんづ龍の毛。からつらとからはな。つがひをざつぶと切て落す。人に取て切所。まつかふこびたい左右の小手。ふりあをのけは内甲。ほろ付と胴中。小手の板のはつれをは。はらりくとない(11オ)

たりけり。馬人のきらひなく。のりこゑく。散々に切てそまはりける。くつきやうの兵者共を其数あまた切とゞめ。残りの兵者共にいた手うす手おふせて。四はうへはつとおつちらす。惣而景清かねらふ所はどこくぞ。谷の堂に峯のたう。音羽常繁桂の里。南都にては東大寺。今度は清水まふで迄。一度ならず二度ならず。三十七度に及んで。心を尽し肝をけし。君をねらひ申せ共。果報いみしくましくてちゞぶ殿にさとられ申て(11ウ)
前後に叶ふ事はなし「コトハ」去間景清。こゝろの内に思ふやう。かかる事さうくしきおりふし。某か京すまのおもへはむやくの次第なり。所詮尾張へくだり。しうとの大宮司をたのまはやとおもひ。尾州熱田にくたりけり。其後頼朝梶原をめしておほせけるは。なにかし世をとりたるとは申せとも。そのしるしも候らはす。それをいかにと申に。平家のさぶらひ太将。悪七兵衛景清に。爰かしこにてせばめられ。よにもくるしう候ぞ。いかにも(12オ)
してかものを。討て捨よとの御誼なり。うけ給はると申て御まへを

まかり立。いたをあまためしよせ。平家の侍太将。悪七兵衛景清を。うちもからめても。六はら殿に参りたらんする輩に。上下をえらますくんこう有へしと札をかひて。京白川にたつる。札たつて十日計はさせるしるしもなかりしに。清水坂のかたはらなる。あこわうと申す遊女。北野まふでをしけるか。京白川の辻々に。立たる札をよふで見ると。よの事にて(12ウ)

はなくし。九ねんつれたる我が妻の。あく七兵衛景清をうたんと書てたてゝあり。「サシクトキ」あこわうあまりのかなしさに。この札をぬすみとり。かも川かつら川へもなかさはやとおもひしか。「コトハ」ちうにてこゝろを引返す。あらはかなの我が心や。日本六十六か国に。平家の知行とて。国の一所もあらばこそ。平家一みのものとは。妻の景清はかりなり。いかにつゝむとするともつゝにはもれてうたれふず。景清うたれてそのうちに。不慮におもひ(13オ)

をせんよりは。九年つれたるなさげに。二人の若かあるなれば。「カ、ルフシ」此事かたきにしらせつゝ。「同」景清をうちとらせ。二人の若を世にたてゝ。あとのあいぐわにはこらんと。おもひすませる。女房のこゝろの内そ。浅ましき。「コトハ」此札をくわいちらうし六はら殿に参り。札のおもてに任せて。女か参りて候と大音上て申す。頼朝なゝめにおほしめし。あこわうを御まへゝめされ。事の子細を尋給ふ。あこわう申けるやうは。さんさふらふ景清か(13ウ)

あり所を。人のしらぬと申を道理とおほしめせ。此ほとは尾州あつ田にさふらふか。平家の御代の御時よりも。清水をしんがう申。月に

一度はまいるなり。明日は十八日。かならず参りさぶらふへし。もとより大酒の事なれば。前後も知らずさふさふず。その時みつかからか参らふするにてさふらふ。大せいそつしおしよせ。景清をうちとつて。みつからに所知をたへなふ我が君と申す。頼朝なゝめにおほしめし。うれしう候あこわうごせ(14オ)

。うつて所知をは出すへし。それくゝとありしかは。しやきん三十兩巻絹五十疋。あこわうごせにくだしたふ。「カ、ルフシ」あこわうたまはり候らひて。「同」清水坂に。かへりつゝ。其日のくるゝを。待たるはなさげなふこそ。聞えけれ。「コトハ」是をはしらすかげ清は。尾州あつたにありけるか。明日は十八日。きよ水へ参らはやと思ひ。熱田のみやを打立て。四日路の道なるを。その日のくれ程に清水坂にぞ着にける。あこわうか宿所にたちより。門(14ウ)

ほとくゝとたゝく。内よりもたそとふ。かげ清なりとぞこたへける。あこわう立出かをとひらき。景清をうちへそしやうじける。むざんや二人のわかどもは。父をはるかに見なれねは。父かあたりになみよりてむつましけなるふぜいなり。「サシクトキ」あこわうなみたをなかしつゝ。あらいたはしやかげきよの。平家の御代の御時は。さこそゆゝしくおほせしに。いつしか平家に過をくれ。「フシ同」せいぎ玉ほこやつれば。御供もなふて。景清はさこそくるしく(15オ)

。おほすらん。「コトハ」かまへをきたる事なれば。数のさかなをとり出して景清に酒をそしいたりける。さる間景清。いとをしき子とはなみあたり。酌にたつたは女房。いつくに心へをかるへき。さ

しうけ／＼のむほとに。さしもにかうなる景清も。かたきの事をはつたと忘れ。うれしう候あこわうごせ。てらへは明日。まいらふするに候。いとま申てさらはとて 「カ、ルフシ」あたる所をづんとたち

〔同〕あひのしやうじをざらりとあげ。簾中にうつりて (15ウ)

。とうのまくらになみよりて。前後もしらす。ふしたるは運のすゑとそ。聞えける 「コトハ」あこわうなゝめによるこひて。てらへはみづからが。まいらふするとてうすきぬとつて。かみにかけ。門より外へ出ると見えしか。清水へは参らすし。六波羅殿に参り此よしかくと申上る。頼朝なゝめにおほしめし。さらはうつたて兵者とて。其せいは三百余騎。はた一なかれさゝせつゝ 「ツメ同」あこわうさきにおつ立て清水坂へそよせにける。比はいつなるらん (16オ)

。八月は十七夜。さよ打ふけての事なるに。月は出てくまもなし。下の小草にいたるまで。かくるゝところはなかりけり。さる間あこわうごぜ。かたちを見れば春の花。すかたを見れば秋の月。みめも姿もならびなき。洛中一番の。美人とは申せとも。九ねんつれたる我が妻の。悪七兵衛を討せんとて。大せいそつしよせたるはひとへに鬼神のごとくなり 「コトハ」三百余騎のつわものを。もんのあたりや築地のわきにかくしをき。我が身は (16ウ)

うちへつと入。寺よりもたゝ今。下向申て。さふらふぞ景清とこそおこしけれ。去間景清は。前後もしらすふしたるか。あこわうかこゑにをとろき。かつはとおき。あこわうかふる舞をたゝ一目みて。そばに立たるあさ丸を。ひぎのうへにとろどをき。いかにやあこわうごせ。

御身はてらへは。参らぬ人と見ないたり。それをいかにと申に。御身のこゝろのほとを。それかししやくして候にすこしもちかひ候ましい。日本六拾六か国に。平家の知行とて。国の一所も (17オ)

あらはこそ。へいげ。一みのものとは。悪七兵衛計なり。いかにつゝむとするとも。終にはもれてうたれうず。なにがしうたれてその後。不慮に思ひをせんよりは。九年つれたるなさけに。二人の若かあるなれば。なにがしをはかたきにうたせ。あとの栄花にはこらんと思ふとも。因果たちまちむくふてまつたう世には出ましいそ。あこわうあまりのふしきさに。さもないものをといふまゝに。かほに紅葉をさつとちらす。景清は見るよりも (17ウ)

。いかにやあこわうごせ。ある事なちんじそ。ある事をちんすれはもみちの色と見ゆるそや。されはけてんのりうしゆほんきやうにも。七の子はなすとも。をんなにこゝろゆるすなと申たとへのある程に。そらうたかひにいひたるそ 「ツメ同」あこわうごぜといふこそおそかりけれ。ゐたるところをづんと立て。ひろえんにおとり出。ついでのおゝいに手をかけ。のびあかつてきつと見る。かしこに甘騎三十騎。甲のはちをならべて。むら雲立てひかへてあり。内へ (18オ)

はしりかへつて。につことわらつて申やう。いかにやあこわうごせわごせはさなしとちんすれとも。ごつめづあはうらせつ。かしやくをはやめて。おそし／＼とせむるも。いかて是にはまさるへき最後のわかれいかにせんねうはうやつとそ呼はりける 「コトハ」あこわうあまりのかなしさに。二人の若か手を引て簾中ふかくそ入にける。景清此

よし見るよりも。あらこと／＼のあこわうか振舞や。たとへは鬼の
 大将か。四十余丈についぢをつぎ。くろかねの門を(18ウ)

立。百万騎かかためたりといふとも。景清ほとこのつわものか。なとか
 一はう打やふらてはあるへきそ。「クトキ」いはんやこれはかみしや
 うじのひとへ。やぶらん事はやすけれとも。日比のなさけたうぎのえ
 しやく。九ねんつれたるそのなさけに「フシ同」わごぜはこゝろ。

かはるとも景清はこゝろかはるまし。やかてことばをかへらるゝ。い
 かに二人の若ともよ。母こそつらくとも。今をかきりの事なれば。
 ちゝかすかたを出て見よ。若どもとありしかは。むさん(19オ)

や二人の若共は。はゝかところを立はなれ。父かあたりになみよりて
 むつましけなるふぜいなり。かけ清は見るよりも。をのれか母の。心
 中ほとつたなかりける。事あらし。それをいかにと申すになにかしか
 事をは。かたきのかたへせせうして。景清をうちとらせ。あとのえい
 ぐわに。ほこらんとおもふとも。いんぐわたちまぢ。むくふてまつた
 ふ世には。出ましい。かくあさましき心中にて。よにもたゝはあるま
 しい。又よの妻にそふならば。ひとつにとれば(19ウ)

けいしの中。又はかたきの子孫とて。あしからふするたびごとに。じ
 やけんをつゑにてうつならば。おさなきものゝくせとして。よの事を
 はいわすして。ちゝよ母よと呼ならば。草のかげにて。景清か見んす
 る事も。むさんなり。いかに二人の若共よ。うらめしきはゝにそはん
 より。ちゝか供をせよやとて。兄花光を引よせて。弓手のひぢの。
 かゝりを二かたながいしへて。おしふする。おと／＼か是をみて。あ

らおそろしのちゝごぜや。我をはゆるし給へ(20オ)

とて。みたる所をたゝんとする。景清は見るよりも。何と申そはな若
 よ。ころすちゝなうらみそ。ころすちゝはころさいて。たすくるはゝ
 かころすぞ。おなしくは。兄と打つれて。えんまのちやうにまいれと
 て。こゝろもとを一かたな。あつとはかりを最後にて。兄弟の若共を。
 三かたながいしつゝ。かたなをかしこへからりとすて。つがはぬ。
 駕のえいやこゑ。うかれ恋の。ふぜひにてわが。身をだいてたゝれた
 り「コトハ」いや／＼弓取(20ウ)

のこゝろはつよくもては剛になる。少ともゆるせはふかくなり。今夜
 のよせ手の人々の。名字なりのをたしかにきゝ。うち死をきはめはや
 とおもひ。今夜のよせ手の人々は。たうか高家のめん／＼か。けみや
 うをうけ給はつて討死せんとそ呼はりける。よせ手のつわもの是を
 きゝ。梶原の源太景末。江間の小四郎義時と。われも／＼と名のりけ
 り。景清はきくよりも。江間殿と申は。たうきみのこじうと。かぢ原
 の源太(21オ)

かけ末。いづれもかたきにをみてきらひなし。けにや平家のさぶらひ。
 剛臆所と承る。いのちのおしいときにこそ。ながい具足もほしう候ら
 へ「ツメ同」又れいのあざ丸はかりにて。まいりさふと云まゝに。
 さつ／＼とはしりより。門のくわんの木を。取てかしこへなけ捨。か
 た戸をひらいて。かた戸をまへにあて。そとなるかたきをうちへ。ひ
 らり／＼と。まねけともさうなふかたきはよらざりけり。余りまてば
 ひい敷に。まいりさふといふまゝに。三百余(21ウ)

騎かまん中へ。ひらり／＼とかかりしを。ものによく／＼たとふれば。玉盤にたまらず。龍の水をえ雲をわけこうへあがることく也。大せいの中へわつて入。さん／＼にきつたりけり。手もとにすゝむつわものを。七八十騎きりふせ。大せいに手をおふせ東西へはつとおつちらしはしつてもんをちやうとさし。ころして置たりし。兄弟の若ともにひし／＼といたきつきはら／＼とないてそたつたりけり。景清か心中(22オ)ほめぬ人こそなかりけり(22ウ)

【校異】

本曲において校異に使用した本は次のとおり。(内)内閣文庫本、(毛)毛利家本、(直)直熊本、(打)打波家本、(東)東大本、(松)松村本、(慶)慶応大学伝小八郎本、(京)京都大学一本

1オ ○はしめて京上り(毛)初京上(内・打・東・松)ういきやうしやう、(直)始て京上、(慶・京)始京上 ○さる間重忠…いかに近恒承はれ(慶・京)重忠本田をめされ

1ウ ○たれ／＼そ(慶・京)ナシ ○ほうらい丸(慶・京)十郎丸 ○赤地のにしきのひたゝれきせ(慶・京)ナシ ○大せいは(内・毛・直・打)わさと大せいは ○に過ぎりけり(内・毛・直・打)とそ聞えける ○ちゝぶ殿の御せいは…十万余騎とそ聞えける(慶・京)ナシ ○とそ聞えける(内・毛

・直・打)としるさるゝ

2オ ○先陳も後陳も(慶・京)せんぢんも後ぢんもかみからしもにいたる迄 ○結城なかぬま…かため給ふ(慶・京)おもひ／＼にかためらる ○小山(直)ナシ ○取分(東・松)とつても ○かゝりけるところに(慶・京)其中にとりわきて

3オ ○浅からす契りければかれか(慶・京)ちぎりを固かのぢやうの ○くわしくとふ(慶・京)景清はいとこまかにぞとはれける ○其まゝ(他本)ありのまゝ ○南都へこそはいそきけれ(打)ナシ、(慶・京)南都へこそはいそがれれかくて東大寺の四方の門はおもひ／＼にかためらる其中にとりわきて手蓋の門こそゆぶせけれ景清 ○腹巻(を) (慶・京)はらまきわたかみつかんでひつたて

3ウ ○大臣殿より給はつたる…さすまゝに(慶・京)ナシ

4ウ ○三百余騎(慶・京)五百余騎 ○三十騎計まつしころにきりふせ(打)その数あまたきりとゝめ(三十きはかりましくらにきりふせ)

5オ ○景清心に思ふ様(他本)ナシ ○ねらははやと思ひ(慶・京)ねらははやおもひいでたつやうこそおもしろけれ ○たけとひとしき笈をかけおのまさかりを打かたけ(内・毛・直)ナシ、(打)へたけとひとしき笈おかけト傍書、(慶・京)たけとひとしきあるおひをとつて肩にひつかけいのめすかひたる大新を弓手のかたになげかけ

- 5ウ ○鎌倉との御参り今やをそしと相待る―(慶・京) お参いつやと待たりけり ○今やをそしと―(内・毛・直・打) 今やいつやと ○相待る―(東・松) まちかくる ○去間―(他本) せんぢん ○あらおびたゝしの山伏達や候―(慶・京) あらことゝしと山臥たちのおほさよ ○どこ山ふしと―(慶・京) 此山伏をいかなる山ぶしと
- 6オ ○わが身にざつとうちかけて―(慶・京) ナシ
- 6ウ ○ふる舞をほめぬ人こそなかりけれ―(内・毛・直・打・慶・京) ふるまひはたゝはんくわいもかくやらん ○物語あり―(東・松) たとへあり ○三井寺なんなくゝかゝせられるに―(慶・京) ナシ
- 7オ ○清盛大きいからせ給ひいそき討手を上せんとて―(慶・京) ナシ ○上せん―(内・毛・直・打) ござん ○去間南都の大しゆたち―(慶・京) 南都の大衆達此よしをきこしめしいやゝゝ ○いまはせんはうつきはてこつがひにんのまなびをし―(慶・京) 身のおきどころのなきまゝに
- 8ウ ○ねらははやと思ひて四条の町に立出て―(打) ナシ ○主君のとく―(慶・京) 主君のため
- 9オ ○有様を―(直) 有様さらゝゝ、(慶・京) すがたをさらゝゝ ○みのうらかへしきるまゝに―(慶・京) あらむざんや景清は ○ならびるたる―(他本) 居なかれたる ○さる間―(内・毛・直・打・慶・京) 先陳 ○本田半沢をめされゝ大事の事の候そ―
- (慶・京) 如何に半沢は物きけ ○かたゝゝ―(打) ちかつね ○あのやうなる―(内・毛・直・打) ことにあのやうなる
- 10オ ○かくいふか無念ならば―(内・毛・直・打・慶・京) かくいふか無念ならばかう申す ○武蔵に下りてあらんす時大御所へ忍ひ入―(慶・京) むさしの国にくだりて後面廊透垣にて ○大御所へ忍ひ入―(直・東・松) ナシ
- 10オウ ○我等かちゝの上総の守をゝきゑんと承はつて候に―(慶・京) ナシ
- 10ウ ○家の忠―(内・毛・直・打・東・松) ちゝの忠 ○其儀にて有ならば―(打・慶・京) ナシ ○あさ丸を―(内・毛・直・打・慶・京) うへなるみのをさつとすていつくにかさいたりけんあざまるを
- 11オ ○太刀―(他本) 刀 ○尾口―(他本) こぐち はらりゝとないたりけり―(慶・京) はらめかひてぞきつたりける
- 11ウ ○其数あまた切とゝめ―(打) 三十騎はかりまつしくらにきりふせゝそのかすあまたきりとゝめゝ、(慶・京) そのかずこれきりりとゝめ ○三十七度―(毛) 卅八度
- 12オ ○思ふやう―(打・慶・京) 思ふやういやゝゝ ○事さうゝしき―(直) そうゝゝしき ○所詮尾張へくだりしうとの大官司をたのまはよと思ひ―(慶・京) かゝる時にこそ世にある舅をたのみくだるところとおもひ ○其後―(慶・京) つぎの日にも成しかば ○なにかし―(内・毛・直・打・慶・京) 頼朝 ○それ

をいかにと申に―(内・毛・直・打) ナシ ○くるしう候ぞ―
(慶・京) 無念に存ずる也

12ウ

○かものを討て捨よとの…札をかひて京白川にたつる―(慶・京) 景清をちうしてたびさうらへ梶原との御説也かちはらうけたまはりやすき程の御事とてやがてふだをかき京白川にぞたてにける ○との御説なりうけ給はると申て―(内・毛・直・打) とそ仰ける梶原承り、(東・松) とそ仰ける承ると申て ○いたをあまためしよせ―(内・毛・直・打) 板をあまためしよせ筆にて物をそいはせける、(東・松) ナシ ○十日計はさせるしるしもなかりしに―(慶・京) 十日計の後 ○遊女北野まふでをしけるか―(慶・京) おんなうすぎぬとつかみにかけ北野へとて参りけるが ○よの事にてはなくし―(慶・京) 別子細にてなかりけり

13オ

○あこわうあまりのかなしさに―(慶・京) 阿子王ふだをようでみてあらあさましの事どもや ○日本六十六か国に平家の知行とて国の一所も―(慶・京) 六十六ヶ国に国の一所も平家の知行か ○いかにつゝむとすると―(慶・京) ナシ

13ウ

○九年つれたるなさげに―(慶・京) ナシ ○二人の若を世にたてゝ―(慶・京) ナシ ○此札をくわいちうし―(慶・京) 北野を余所にふし押しそき ○大音上て申す―(毛・東・松) 大音上てよはゝる、(内) たからかによはゝる、(直・打) すみやかに申す、(慶・京) たからかに申 ○頼朝なゝめにおほしめし…道

理ともおほしめせ―(慶・京) 折節らいてうはきこしめし去事ありそれこなたへと仰あつて御前にまじいだされ始めをはりの事もくわしくとはせ給へば阿子王うけたまはり景清が事を人のしらざるも一つは道理とおほしめせ

14オ

○清水をしんがう申月に一度はまいるなり明日は十八日かならず参りさぶらふへし―(慶・京) 清水へ月詣をつかまつりさぶらうがけふははや十七日ゆふさりみづからがやへこえ候べし今年九年契り二人の若が候らへば景清もみづからをば心やすくぞおもふらん ○前後も知らず―(内・毛・直・打) 酒をすゝむるものならは前後もしらす、(慶・京) 酒をすゝめさふらはとさしもにたけき景清も前後もしらす ○みづからに所知とたへ…それくゝとありしかは―(慶・京) 四海の安気をたなごゝろにおほしめし侍へ我君とこそ申けれ頼朝なゝめならずにぎよかんあつてなにさまうつてしよちをばゑさすべしとて ○なゝめにおほしめし―(内・毛・直・打) きこしめされて ○あこわうごせ―(内・毛・直・打) ねうはう

14ウ

○是をはしらすかげ清は―(慶・京) あらむざんやかかげきよはは十八日―(慶・京) けふははや十七日 ○熱田のみやを打立て…あこわうか宿所にたちより―(慶・京) しのび都へのぼり香栖宿に立よつて

15オ

○かげ清なりとぞこたへける―(慶・京) くるしうもさふらは

ず景清にて候ぞ爰を開よと申す ○むざんや二人のわかどもは：
あこわうなみたをなかしつゝ(慶・京)いつゝよりも阿子王
御ぜんむつまじげなる風情にてなみだをながし申けるは ○さこ
そゆゝしくおはせしに(内・毛・直・打)一時のまふてにも中
間こものはなやかに馬くらこぐそくしんしやうにしさこそゆゝし
くおはせしか、(慶・京)悪七兵衛景清とて公家にも武家にもに
くまれずいつときの詣にも馬鞍小具足じんじやうにさもゆゝしく
渡らせ給ひしかげきよの

15ウ ○かまへをきたる(内・毛・直・打・東・松)かねてよりか
まゑをきたる、(慶・京)こよひはかくておやすみあれ寺へはみ
づからがまいらうするにてさふらふぞ景清とぞ申けるかまへおき
たる ○とり出して(内・直)とゝのへて、(打)調べてへとりい
たし(慶・京)さる間景清いとをしき子ともはなみゐたり酌にたつた
は女房(慶・京)酌にたつたるは女房いとをしき子共はなみゐ
たり ○てらへは明日まいらふするにて候(慶・京)ナシ
16オ ○てらへはみづからが：清水へは参らすし(慶・京)急 ○
まいらふするとて(内・毛・直・打)参らふするにてさふらふ
いとま申てさらはとて、(東・松)参らふするにてさふらふいと
ま申てかけきよとて ○さらは(内・毛・直・打)いそぎ ○
うつたて兵者として其せいは三百余騎(慶・京)うつ立給へ人々
うけたまはると申て寄手の大将には江馬の小四郎長野の三郎かち
はらの源太景季其勢三百五十余騎にはすぎざりけり

16ウ ○下の小草にいたるまでかくるゝところはなかりけり(慶・
京)ナシ ○我が妻の悪七兵衛を討せんとて(慶)ナシ

17オ ○寺よりもたゞ今(慶・京)あらくるしやざうらう只今みづ
から寺より ○あこわうかこゑにとろき(慶・京)ナシ ○
あこわうかふる舞をたゞ一目みて(内・毛・直・打)ナシ、(慶
・京)阿子王か姿を唯一目みて ○そばに立たるあさ丸をひざの
うへにとうどをき(慶・京)ナシ ○いかにやあこわうごせ
(内・毛・直)ナシ、(打)へあこをうかすかたをひとめみて、
(慶・京)いや

17オウ ○御身はてらへは参らぬ人と：あこわうあまりのふしきさ
に(慶・京)御身は寺へは参らぬ人にてありそれがしが事をか
たきのかたへせせうし猛勢をそつして推寄門の辺や筑地のあたり
にかくし置御身は内へいつたるよな阿子王此よしきくよりもあま
りの事にてあるあひだ

17ウ ○なにがし(内・毛・直・打)景清

18オ ○ある事を(内・慶・京)ある事をたにも ○ひろえんにお
とり出(慶・京)広縁にとんで出さつゝとはしりよつて

18ウ ○あまりのかなしきに(慶・京)此よしきくよりもあまりの
事のおそろしさに ○簾中ふかくそ入にける(慶・京)あひの
しやうじをさつとたて簾中ふかくぞ忍びける ○鬼の大将か四十
余丈についぢをつき(慶・京)おにの大将八面大王岩をきつて
八まんゆじゆんにたゞみあげ

19オ ○かみしやうじー(内・東・松・慶・京)しやうし ○九ねん
つれたるそのなさけにー(慶・京)ナシ

19ウ ○父かあたりになみよりて…かけ清は見るよりもー(慶・京)
父がたもとにとりつゐて父よく計なり景清は御覽じて二人の
わかどもおくれのかみをかきなでー ○それをいかにと申すにー
(慶・京) ナシ

19ウく20オ ○かくあさましき心中にて…いかに二人の若共よー(慶
・京) ナシ

20オ ○ちよか供をせよやとてー(慶・京) 父もろともに打つれてゑ
んまのちやうに参れとて ○弓手のひぢのかゝりをー(慶・京)
ナシ

20ウ ○とてゐたる所をたゝんとするー(慶・京)とよ ○えんまの
ちやうにまいれとてー(慶・京) えんまのちやうにてちよをまち
よと宣てつかんで引よせて ○いやくー(内・毛・直・打・慶
・京) 景清心に思ふやういやく

21オ ○今夜のよせ手の人々の名字なのりをたしかにきよー(慶・
京) 祇今よせられたる人々のけうみやうをうけたまはつて ○う
ち死をきはめはやー(東) うちじにせばや ○おもひ今夜のー
(内・毛・直・打) 思ひいかにや今夜の ○今夜のよせ手の人々
はたうか高家のめんくかー(慶・京) ひろえんにとんでいで
たゞ今よせられたる人々はいかなる人にてましますぞ ○高家の
めんくかー(内) かうけか ○よせ手のつわもの是をきよ…わ

れもくど名のりけりー(慶・京) よせ手の大将には江馬の小四
郎長野三郎梶原の源大景季とこゑくによはる ○江間の小
四郎義時とー(内・毛・直・打) えまの小四郎爰にありと ○わ
れもくど名のりけりー(打) こゑくによはる ○かぢ原の
源太ー(慶・京) 長野殿と申はちよぶ殿の御舎弟御所の源太
21ウ ○けにや平家のさぶらひ剛臆所と承るー(内・毛・直・打) ナ
シ、(慶・京) 誠やうけたまはれば平家のさぶらい大将のかうお
くのところとうけたまはる高名不覚はおりによる ○さつくと
はしりよりー(慶・京) ナシ ○ひい敷にー(直・打・東・松)
ひさしきに、(慶・京) 久しさに ○まいりさふといふまゝにー
(慶・京) ナシ

22オ ○大せいの中へわつて入ー(慶・京) 西からひがしへ一文字北
からみなみへ十文字八方をさしからんで一方へをんむけ ○さん
くきにきつたりけりー(打) 西から東北南くもてかくなわ十文
しやつ花かたといふものに散々にきつたりけり ○七八十騎ー
(慶・京) 五十三騎 ○大せいに手をおふせー(東) ナシ ○お
つちらしー(慶・京) おつちらし内なるかたきはらりくどをん
だひて ○ころして置たりしー(内・毛・直・打・慶・京) れん
ちうへつつといりころしてをきたりし

22ウ ○ほめぬ人こそなかりけりー(慶・京) きせん上下をしなべか
んせぬ人はなかりけり

